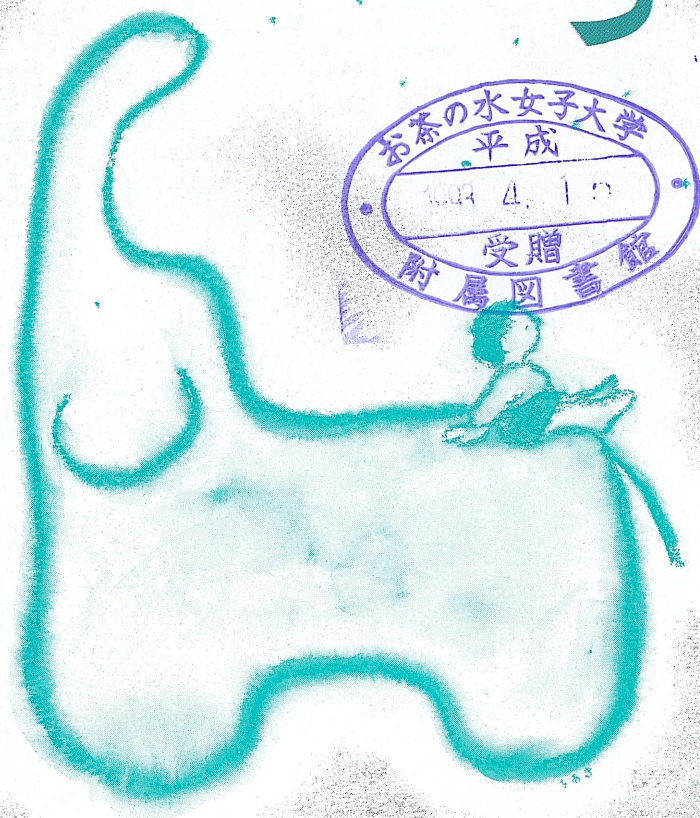


幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

1993 5



第92巻 第5号 日本幼稚園協会

フレーベル館創業 85周年記念ビデオ出版

教育遊具 フレーベル恩物 gabe

ビデオ へ全五巻へ

幼児教育の先駆者、
F.W.フレーベルの生涯と、
自らが考案した恩物の
使い方を体系的に収めた
世界で初のビデオが完成！

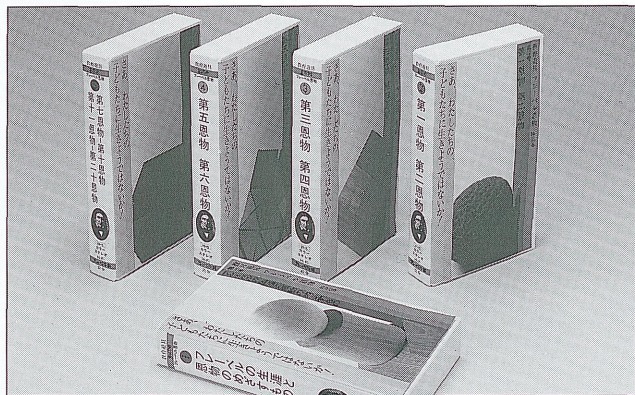
フレーベルの遺した幼児のための最高の贈り物“恩物(Spielgabe)”について、その根底に流れる思想と、その望ましい与え方、使い方を幼稚園での実例やコンピュータグラフィックスなどで、わかりやすく解説したビデオです。

監修 ■ 和久洋三
(おもちゃの科学研究会代表)
企画協力 ■ 青木八代
(元 玉成保育専門学校教諭)
指導協力 ■ 学校法人アルウィン学園
玉成保育専門学校
撮影協力 ■ 学校法人アルウィン学園
玉成幼稚園

発見は遊びの中に。
現代の子どもたちへ
ゆたかな創造力を導く
フレーベルの恩物。



教育遊具 フレーベル恩物gabe(全五巻)



第1巻・フレーベルの生涯と恩物 のめざすもの
第2巻・第一恩物 第二恩物
第3巻・第三恩物 第四恩物
第4巻・第五恩物 第六恩物
第5巻・第七恩物～第十恩物 第十一恩物～第二十恩物

全5巻 紙ケース入 70,000円(税込)分売不可 ★カラー/ステレオ/HIFI

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783代にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼 児 の 教 育



第92卷 第5号

幼 児 の 教 育 目 次

—— 第九十二卷 第五号 ——

© 1993
日本幼稚園協会

△巻頭言▽五月に思う……………清水 光子……………(4)

連想……………津守 真……………(7)

真の学力とは何かを問うことから

障害児の学力観について……………関 祐二……………(10)

OMEPP世界大会(アリゾナ大会)に参加して……………小川 清実……………(18)

堀合先生に学ぶ②……………上垣内伸子……………(28)

保育への視座⑨ 若い保育者の方々へ……………河邊 杲……………(36)



ある日の育児日記から(29).....佐藤 和代...(41)

保育現場で感じること

自己中心主義をテーマに.....上坂元絵里...(42)

子どもたちへのまなざし(3) 心の鍵.....松井 とし...(46)

幼稚園の先生になって.....渡辺 知子...(48)

若いお母さんたちへ

娘の幼稚園就園を考えて.....河合 聡子...(56)

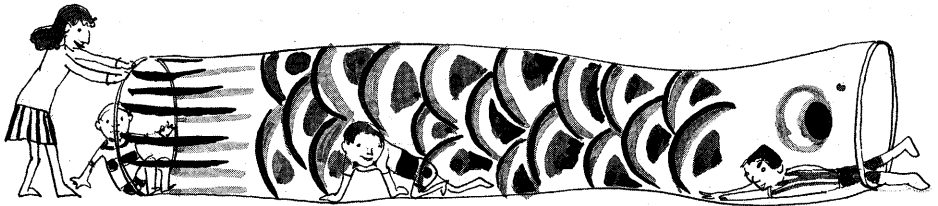
表紙・紺野 千秋／扉題字・堀合 文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／田代 和美

田中三保子・岩上 節子

編集部・大沢 啓子



五月に思う

清水 光子



倉橋惣三先生の『育ての心』の『五月』。「何と
いうすばらしい生育の力であろう。」にはじまっ
て「子どもらの活力の伸長……毎日その中に俱に
居ながらも、日々に新しい目をみはらさせられる
ことばかりである。」「伸ばそうとするばかりでな
く、伸びるのを待っているばかりでなく、現に目
の前に斯うまで伸びゆくのを驚く心。——それが
五月の心であり、また教育の心でもある。」つづ

いて『五月の日光』に「盛りあがる土のいのちに
晴々と笑みかけて、一切の生育を思いのままに遂
げさせているものは、五月の日光である。(中略)
強いて育てるでもない。激しく励ますのでもな
い。ただ自らわかまわりなき明朗さにおいて、育つ
ものを育てさせているのが五月の日光である。」と
讚え、結ばれている。この祈りにも似た詩のよう
な『育ての心』を書かれた時から半世紀以上経っ

ている。

人間の生活の便利、利益のみを追及した科学技術の発達進歩のめざましさが社会環境を、更に自然破壊という形で、自然環境までも変えている。

このアンバランスというか、矛盾だらけな今、私たち大人は受けついできたDNAに刻みこまれた能力のよきものを更によく、発揮できるように、次の世代に伝えていかねばならないと思う。宇宙旅行が気軽にできる、海底にユートピア都市をつくる、このような夢を抱くのも結構。でも私はもっと身近な、或いは地球のそここの隅に生きる稚い命の今を明日を考える。教育要領のことがどう変わろうと次々に新しい情報処理等の機器が出てこようと不変な願い、祈りを思う。

みどりの日の前に朝顔の種子を蒔いた。銘々一鉢に三粒ずつ。名札をつけた。連休中は宿直の人に水やりをたのんだ。連休明けの日母親の傍から又離れがたくなったAくんも、友だちの声に誘わ

れて庭に自分の植木鉢を見に出してきた。何と、つややかな双葉が出ているではないか。Yちゃんのも、K君のも少しずつ大きき、色がちがいがら出ている。一しょになって喜ぶ。が一方になぜかまだ土のふくらみさえみえない鉢を抱えこんでしょんぼりいるIちゃん、M君がいる。「大丈夫、きみのはちょっとお寝坊なのかもね。目を醒したら元氣一杯大きくなるわ、お日様がよく当たる所に置いてやりましょうよ」と大人がいう。

三月四月と子どもの身边に起こった生活の変化が一応収まったように見えもするし思われもする五月、でも心のバランスがまだ充分でない子どもがいるのを大人は見のがしてはならない。子どもの日、遠足、運動会など行事が五月空の下、晴ればれと行われる五月に、心身のバランスにゆがみのある子どもがありはしないかと、一人一人への細かい心くばりがしんそこ望まれもする五月である。

故幸田文先生が話された。こぼれ種から咲き出た菜の花の小さく、かぼそい茎上の濃い黄色のけなげにも美しい色。えぞ松の自然林がなせ一列にしか生育していないかをしらべに北海道へいかれ、倒れた（雪、風などで）親木の上に芽生えた数千の稚木が互いにしめぎ合いながら、猛々しく、懸命に、黙って苦しみ悲しみに耐えて横たわって死んでいる親木を養分にして育っているというわけを知り、なお且つ切株の親木を大事に温かく囲んで立っている若木（といっても樹齡二百年をこえる）の姿に深く感動された、と。

二十一世紀を担う子ども達に私達大人が何をどうしたらいのか、何事も地球規模で考えるべきだといわれる今、そのことを教えられたように思い、胸が締めつけられるようで老いの眼はじ

わーっときたのだった。

先頃じゃが芋袋にどっかりと入った男女が「こうしているよ、芋のキモチがしみじみわかりますね」とほほ笑んでいるコマージュがあった。面白いなと思った。子ども達の中にいて、一しょに遊び、生活し、どっかりと住み暮らしてこそ子ども一人一人のきもちがしみじみわかるのだな、と又しても我、田に、水をひいてしまった。

「自然と一致するのは児童こどもの榮譽、児童こどもと一致するは教師（おとな）の榮譽」との倉橋惣三先生がスタンレー・ホルルのことを度々言われたのを思う。

ジャガ芋の花が咲き始める五月である。

（音羽幼稚園）

連想

津守 真

私の学校に、よそから頂いた屋根付きの自動車がある。ペダルを踏むのでもなく、足で地面の上を歩いて動かすだけの単純なつくりなのだが、ドアが開くようになっていて、子どもたちの間に人気がある。

ある日、ひとりの子どもが、この赤と黄色の自動車に乗って、庭からホールへ、そして廊下へと動かしてきた。保育室の前まで来ると、ドアをあげて降り、部屋の中に入っていった。じきに部屋から出てきたその子は、屋根付き自動車に乗ってホールに出てゆき、また保育室の前にもどってきて、ドアをあげて降りた。こうして何度も出ていってはもどって来た。これを見ていると、車からおりて何か用事を済ませ、また車に乗って出かけてゆくという、そういうストーリーをもってこの子は動いているのではないかと思えてく

る。ただ意味もなく乗り降りしているだけではないだろう。この子の生活を遊びに再現している。実生活では子どもはひとりでタクシーに乗ることはないが、遊びではひとりでタクシーに乗ることができる。その得意さも感じさせられる。

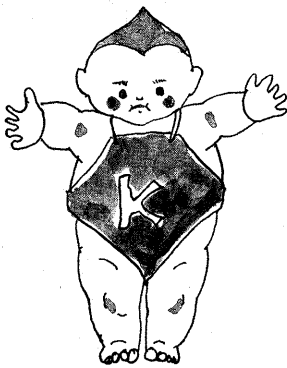
私はその子と一緒に車の扉の開閉を手伝ったりするうちに、私自身の幼い頃のことを思い出した。それはまだ人力車が使われていた頃で、ごく特別なよその家の訪問の折に、人力車に乗せて貰った記憶である。人力車の座席は高いので、車夫が私を抱きかかえて、父の膝にのせ、毛布をかけて、布張りのとびらを閉めてフックをかけた。父にとって重要な外出のときの緊張感がその膝の温もりと共に私に伝わっていたが、前後の具体的なことは記憶にない。ただ、乗り降りするときの感覚が鮮明で、稀な外出の緊張と興奮が布張りのとびらに凝縮されている。

こういう連想は、保育とは関係がないようにみえる。しかし、私はこの子が屋根付き自動車から降りたり乗ったりする傍にいて、その扉の開閉にこの子の生活経験がこめられているように思えた。この子はときどきタクシーに乗って学校に来るが、それは大きな荷物があるときや、母親が心身の具合が悪いとき、ひどい雨降りのときなどである。私にとつて、この子の生活経験の内容は未知であるが、この単純な遊びの中に、この子の世界が広がっている。そう気が付くとき、大人の一方的な見方で行動を見るのではなく、子ども

の側に身をおいてみようという、私自身の世界の拡がりが生まれる。

それまで私は交通整理の警官のように、オーライと言って手を振っていただけだったが、こう気が付くと、雨傘をさしかけたり、荷物を車にいれたりする、そんないろんな試みは、子どもの側に身をおき換えてみることから生じる。大人の連想は、そのまま眼前の子どもにあてはまるわけではないが、眼前の知覚から大人を解放して、よりひろい世界を見る可能性を開いてくれるのに役立つであろう。

(愛育養護学校)



眞の学力とは何かを問うことから

障害児の学力観について

関 祐二

○はじめに

長野県ではここ二、三年、マスコミを含めた「学力」についての議論が、さまざまな角度から高まっている。

学力問題の発端は、県内高校生の「有名大学への進学率の低下」が明らかになったからである。私は、教育の成果を「有名大学への進学率」で評価することにこそ問題があると考えているので、「本質はそこにはない」と思っているが、現代社会において、有名大学への進学率が高いことは、その県の教育の高さ(?)を示す一つの基準となっていることも否定できない。これはいわゆる能力主義的な考え方である。一流企業に入るために一流

大学をめざす風潮がいまだに存在する。一流企業に入っても「幸福な生活」が保障されるわけではないことがわかりかけているけれど。

また、戦後その目標につき進んできたためにもたらされた校内暴力、いじめ、差別などの教育荒廃や、思春期やせ症、不登校などの病理学的現象が大きな社会問題として指摘されるようになって、「学力」についていろいろな反省もされている。

そしてこの「学力」についての議論は、養護学校にもさまざまな影響を与えている。

できるだけ早い時期にいろいろな知識や技能を身につ

けることが大切で、そのために教科的な学習を訓練的に取り入れてほしいと要望する親たち。知識・技能をたくさん身につけることが「学力」になると考え、養護学校は普通学校の教科を簡単にしてわかりやすく教える場所であるといろいろな教育技術や法則を取り入れている先生たち。それらの声を聞いた際に、子どもたちの心の問題はどこへ行ってしまったのか、真の学力とはいったい何かを考えざるをえない。

○生き方や人生にかかわる力

私の中では漠然とだが、真の学力は量ではかるものではなく、質でとらえられるものだという考えがあった。つまり、試験などの点数で量的にはかれない、一人一人の人間の生き方や人生を支える質的なものであるという考え方である。

この考え方の方向性を確かなものにしたのは、昭和六十三年に内地留学して学んだお茶の水女子大学附属幼稚園の実践や、実習生として参加した愛育養護学校の実践

に出会ったからである。

昨年七月、久しぶりに訪れた本田和子先生の研究室で、長野県の「学力問題」について言及したところ、本田先生より「障害児教育にとっての学力観とは何か問うてみる必要がありますね」とタイムリーな課題を与えられた。またそのあと訪れた愛育養護学校では、津守真先生より、「養護学校の中で生活か教科かという対立関係だけで議論することは不毛です」と指摘され、いろいろな観点から「真の学力」に迫ってみる必要性を教えられた。

私はこの二年間、県の学力向上調査研究委員会の特殊学校部会に参加してきたが、調査の結果、障害児教育に携わる多くの先生方が、みな同じような問題に悩んでいる実状を知った。出された意見を集約してみると、つぎのような点があげられる。

一、「学力」を「自立する力」ととらえた上で、その考え方、見方の共通理解が教師間でなかなか深められない

い。

二、「自立する力」を子どもの動きや実体から見るときに、どんな観点でとらえられるのか、その方法が明確でない。

三、障害の重度、重複化に伴い、その多様性、発達の相違、個人差に応じた指導の内容をどのように具体化するのか。(とかく部、学年など全体で学習活動をするめる傾向が強く、個々の教育課題を明確にして取り組むことが少ない。)

四、教科を中心に下学年対応で学習をすすめようとする考え方と、生活に即して身近な題材を見つけて学習しようとする考え方の相違がある。

五、子どもの心をとらえる教師の目や感性を高めるために、専門的な研修が要求される。

六、学校で育てたい力と家庭や社会から要請される力とのあいだに大きな差がある。

七、子どもの実態に合わせた教材・教具の工夫が必要であるが、創作のための予算、時間、設備などに制約が

ある。

以上七点くらいにまとめられたが、障害児の学力についてさまざまな問題や考え方があることがわかった。

そこで、私の体験や実践から障害児の学力について今、考えていることを述べてみたい。本稿では一人の知恵遅れの児童(S男)と私との関わりを中心に考察してみた。

○S男の生き方を支える力

S男は小学部に入學し、この三月で二年が経った。入學したときは教室の隅にいてまわりをうかがっている感じだったが、しだいに活動的になり、今ではすっかり自分を出して友だちとの関わりも広がっている。

このS男が入學したころを思い出すと、あのとときのS男の生き方を支えた「真の学力」が見えてくるようで、いつまでも印象に残っている。

私はS男との出会いをつぎのような記録にとつてい

る。

*

記録①

入学式の日、父母から離れられなくて、「(一) わいよ、(二) わいよ」と泣く。母親から、「はじめての場所、はじめての人とはすぐに慣れません、だんだん慣れてくると元気になるよ」と言われた。新しい世界や人に対し、不安や恐れを感じているらしく、目をキョロキョロさせながら母親の手をしっかりと握っている。母親が、「この先生がS男の先生だよ」というと私の目をちらっと見る。私はこのS男が気になり、入学式がはじまるまでのあいだ近くいてみようと思う。母から離れて私の方に来てくれるだろうか、泣かないでステージに登れるだろうかなど頭をかすめた。父母が近くにいたこともあり、しばらくしてそばにあった絵本を見つけ、ペラペラとめくりながら、興味をもった絵を見て、私の目を見ては何か言おうとしている。そのときS男と気持ちがつながったような感じがした。「これはぞうさんだね、これはうさぎさんだね」と答えると、

つきつきに絵を指さしていく。入学式を告げる放送があつて、「S君いこうか」と私が手を差し出すと、父母の方を見る。どうするかと思つて待っていると、S男の方から手をつないでくる。私はうれしくなつてS男の手を少し強く握りしめた。体育館に近づくにしがたつて父母と離れなければならぬので、S男はしきりに父母の方を見たくてふりかえる。そのたびに私の手を握る力が強くなる。入学式がはじまつて表情も体も硬くなつてきたが、泣くこともなくステージに上がり緊張のうちに入学式を終わる。

教室にもどつて父母の顔を見るとすぐに行つて母親の手を握っている。

はじめての給食を自分から何ひとつ食べようとしなかった。新しい状況を受け入れられないときは、食べ物も入らないのだろう。

この記録を読んでもみると、S男の新しい世界や状況に対する不安や恐れが感じとれる。と同時に、S男を気にしている私自身の不安も読みとることができると、こんな

ときは、未知の世界の中で、自分が小さくなっていくような感覚を子どもは抱いてしまうのかもしれない。それを支えてくれる人の存在があったから何とか自分を保っていられたのだろう。

*

記録②（数日後）

S男はプレールームの片隅にすわりこんで小さなボールをいじっている。ほかの子たちはすべり台やブランコなどで活発に遊んでいる。S男が隅にすわってつまらなそうにしているので近くに行つて一緒に遊んでみようと思つた。

壁にお化けの絵がはつてあったので、「おぼけやつつけてやる」と言つて私がボールを投げつけると、それに興味をもつたらしく、膝を立てて見ている。それからお化けの方を指さしてボールを投げるまねをする。私はもつとボールをぶつけてほしいと要求していると思いきりかえすと、S男が立つて私のそばまで来る。とうとう自分からボールを拾つてお化けにぶつける遊びを喜んではじめた。

私はあとでこのときのことをふりかえり、S男のいた位置と身体の動きに注目し、S男の気持ちの動きをはつきりと感じとることができた。プレールームの隅ですわっている↓膝を立てて見ている↓立つて私の傍まで来る。これらの動きの中に、S男の意欲的な主体性が読みとれる。

この日から私が食べ物を口にもつていくと自分から食べるようになった。

*

記録③（さらに数日後）

プレールームのなだらかな坂を私とほかの子どもたちが



ミニカーに乗って下りて遊んでいると、しばらく見ていて、自分からあいているミニカーを見つけて乗った。それまでは誘っても乗らなかったのに、楽しそうに遊んでいる雰囲気を感じとって、やってみようと思ったのではない。しかし自分から坂を下りようとはしない。ミニカーに乗って友だちや先生が下りてくるのをバチバチと手を叩いて喜んで見ている。「S君もやってみようか」と坂の上から私が誘ってもいやいやをしている。ミニカーにまたがっているだけで満足しているようだ。

この記録を読んでもみると、ずっと私のそばにいたS男が、だんだん新しい状況に自分から挑んでいこうとする芽が感じられる。しかし坂を下りて遊ぶことには躊躇しているS男がいて、自分なりの判断で拒否することもある。

○内面の主体性を培う力

S男の記録と考察をもとに、はじめに述べた「質的な

学力」について整理してみたい。

質的な学力とは、子どもの内面の主体性を培う力だと考える。自分が自分らしく生き、自分で自分の人生を展開していく力だとも言える。その主体性を培う力を、もう少しわけて四つの観点から見ると、つぎのようになるのではないか。

- ① 情緒を安定していく力
- ② 意欲を形成していく力
- ③ 状況や関係を理解・判断していく力
- ④ 知識・技能を生かしていく力

ただし、これらの力は、バラバラに働くものではなく、相互に関わり合い、現実を生かされていく力である。またこれらの力が子どもひとりひとりに醸成されるまでのプロセスを大切にしたい。つまり「 \sim になる力」「 \sim になりつつある力」に育つ過程を通してはじめて獲得される力となるだろう。

これら四つの観点からもう少し考察を加えてみると、記録①において、新しい世界に不安や恐れを感じている

S男が、母の手をしっかりと握っているところで、その手と手のあいだに二人の深い心の結びつきを感じとることができる。またはじめて出会った私にも安心した気持ちを抱き、信頼感を寄せてきている。こういう人を信頼する力は①の情緒を安定する力に入るのであろう。安定できるところをたよりに、新しい状況や困難を受け入れ、乗りこえていく力にもなっていく。

記録②において、ボールに興味が向いているS男に何らかの関わりが持てないかと積極的な気持ちがある中であって、S男の要求に応えながら関わっていくうちに、S男自らがボールを使って遊ぶ姿に変容している。これは、S男の意欲があらわれ、形成されていく過程と考えられる。

記録③において、楽しい雰囲気を感じとり、その状況に自分から身をおくことを選んでいるともいえる。しかし、坂の上から下りるには、さまざまな状況と状況の関係、人と人との関係から判断して、「自分にはまだ無理」と思ったであろう拒否という意志を表現している。そし

てミニカーにまたがっている「今」に満足している。このような人と人とのあいだやこととこととのあいだの関係を理解し判断する力がS男にはついてきていたのであろう。

○内的な体験を通して

以上、一人の知恵遅れの児童を事例として取り上げ、現在私が考えている「真の学力」について述べてきたが、このような学力は子どもの生活に根ざした内的な体験を通して培われるものであろう。しかし、能力主義といえる社会の中の学校で、このような内的体験を大切にしたい授業実践をしようとするとかなりの勇氣と思いきりと覚悟がある。それははじめに述べたさまざまな考え方や価値観があるからである。

しかし、今こそ、本質を求め、真の学力を模索しながら実践していく以外に、子どもたちの内的な主体性を育てる道はないのではないか。子どもたちの質的な学力に価値を求める人が増えていくことを願う。そうすれば、はじ

めにあげたいいくつかの問題点も解決の糸口が見つかるであろう。

私は日々の学校生活の中で、子どもの内的主体性を育てるために、つぎのことを心がけようと努力している。

○ 子どもと自分との関係の上で、子どもの心と自分の心とのやりとりを打診しながら展開していく。体と体との触れ合いの中で、心と心の深いところに届くような触れ合いを大切にしていく。

○ 子どもに教えようとする授業ではなく、子どもといっしょに学ぼうとする授業をつくる。

○ できるとかできないとか結果を重んずるのではなく、いかにその子らしくやろうとしているか、生き生きとしているか、その過程を大事にする。

○ 授業記録をとり、それをもとに職員チームがお互いに理解し、価値観を尊重し合う関係をつくっていく。

○おわりに

子ども一人一人の内面の主体性を支える教育こそ価値

がある。そういえるために改めて真の学力の意味を問う必要がある。また目に見えない子どもの内面とのふれあいや対話から生まれる本質的な問いを吟味することからはじめていきたい。

だれもが皆人間として生命的な力にあふれていることに価値を見出せるようなものの見方や考え方をしていきたい。

(長野養護学校)

〈参考文献〉

○ 津守真先生のすべての著作。実践から語られる先生の言葉には示唆に富むことが多く、何度読んでも深く新たな視座を与えられる。津守理論ともよばれる展開をここで再び勉強させていただいた。

○ そのほか『学校生活の中での子どもとおとな』(岩崎禎子先生『教育と医学』慶応通信 一九九二、十二月号)、『生活をつくる子どもたち』(飯島婦佐子先生『フレーベル館』を参考にした)。

OMEPP世界大会（アリゾナ大会）に

参加して

小川 清実

昨年の一九九二年八月三日から六日まで、三年に一度、開催されるOMEPP（世界幼児教育機構）第二十回世界大会が、アメリカのフラッグスタッフにある北アリゾナ大学で行われました。

OMEPPと私との関わりは、以前、OMEPPの活動のプロジェクトの一つである「子どもの伝承遊び」についての共同研究に参加して以来のことですが、私自身、世界大会に直接、参加したのは、アリゾナでの大会がはじ

めてのことでした。これまで何回か、外国への旅の経験はあったのですが、アメリカというところを訪れるのは、私にとって、やはりはじめての体験でした。その上、今回の旅には、私の小学校五年生と六年生の二人の娘をつれて出かけるという、これもまた初体験ということになったのです。子どもたちにとっては、外国に出かけることはもちろんはじめてということだけではなく、飛行機に乗るのも、はじめてという、「はじめて」だら

けの旅になりました。

実際に世界大会に参加すると決めたものの、フラッグスタッフという場所が、アメリカのどこにあるのか、どのような町の様子なのかを知る機会が、あまりないままに、出発するということになってしまいました。日本に残していく、家族やペットへの配慮や手配をしているうちに出発日が来てしまったというのが本当のところでは、同業者の夫は、夏休みとはいうものの、日本の中を、仕事で飛び回る日々を過ごすことがわかってしまったので、老人性痴呆症の夫の母親は、時々お世話になっている、特別養護老人ホームで預かっていただくことが決まり、犬も、獣医さんのところでお世話になることが決まったのは、七月末日でした。そして、八月二日に成田を出発したわけです。

OMEPP世界大会に参加すると決めた時に、毎回世界大会に参加されているOMEPP日本委員会理事の大戸美也子先生から、プログラムをお借りして、内容がどのようなものなのかを見せていただきました。アリゾナから

のプログラムには、一九九二年八月二日から八月七日までの六日間という長い期間に様々な催しが用意されているのを知り、正直なところ驚いてしまいました。日本での学会などでは、六日間という長さは考えられないことです。OMEPP世界大会では、基調講演や研究発表だけではなく、特別なイベントもいくつか計画されていて、プログラムを見ただけでは、どのような会であるのか、全く予測できないものでした。日本からはOMEPP世界大会参加のためのバック旅行が企画されたので、子ども連れの私としては、安心して参加することができました。

フェニックスへ

フラッグスタッフには、直接飛行機で行くことはできません。そのためにフェニックスまで飛行機で行き、そのあとは、バスなどの車で北に上るのです。今回の世界大会では、まずフェニックスが集合場所となりました。

飛行場のあるフェニックスの隣りのメサ市で、世界大会に先がけて、八月二日の夜にメサのハード美術館で夕食会が催されることになっていたので。

そこで、日本時間八月二日午後六時すぎに成田を出発し、約九時間後、アメリカ時間八月二日昼頃にサンフランシスコに到着し、国内線に乗り換えて、さらに二時間。フェニックスに着いたのは、午後三時すぎでした。

私は、前日、成田に着いたのと同じくらいの時間にアメリカのフェニックスにいますという感覚がしっかりと把握できずにいたことと、八月にしては比較的涼しかった東京から、一気に気温四十三度という猛暑のフェニックスにきてしまった。その肉体的なショックでしばらく茫然とした思いをしたことを憶えています。

一方、健康に恵まれた娘たちは、飛行機の中で、何回かのスチュワーデスとの“*What do you drink?*”のやりとりにもすっかり慣れ、自分の口に最も合う飲みものを見つけ出していました。離れ離れにすわらなければならなかった、アメリカ国内線の中でも堂々と“*Seven*

up, please.”とやっていたのには、親として頼もしい思いをしたものです。そして体温をはるかに越えたフェニックスに着いても元氣そのもの、時差など関係がない様子でした。

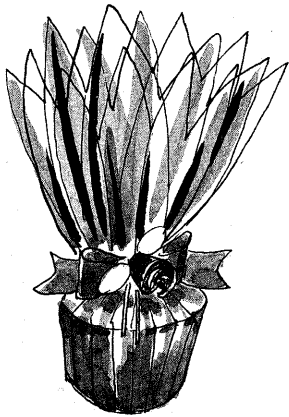
ホテルに荷物を置き、着換えもそこそこにバスでメサの美術館に向かいました。美術館で、O M E P 世界大会に参加するメンバーの交流を図るための夕食会が催されたのです。ハード美術館の中庭で、冷たいレモネードが用意されており、夜になっても相変わらず、気温四十度というような暑さの中、のどを潤しながら、展示を見たりして過ごしました。このハード美術館で立食パーティが催されたことから、私には、アリゾナで行われる世界大会のスタッフの、ある意志が伝わってきた思いがしました。なぜなら、この美術館は、アメリカ大陸の先住民族である、インディアンと呼ばれる様々な部族の歴史や文化を紹介しているところであり、私たちに提供された食物は、先住民の人々の、米を中心とした典型的な食事だったので。茶色っぽい、ピラフのような「ごは

ん」は、とてもなつかしい香りがして、とてもおいしいものでした。

アメリカというと、すぐに白人や黒人やあるいはアジア系の人々を思い浮かべるのですが、アリゾナにはたくさんインディアン居留地がある所なのだということが気づかされたのでした。白人でも黒人でもない、先住民族（インディアン）の人々に、私は大変安心感と親近感を覚えました。何時間もかけて、アメリカという外国に来たはずなのに、緊張感もなくなり、妙に落ち着いてしまい、日本語で話しかけたら、日本語で答えてくれるような気分になってしまいました。娘たちは、美術館で、織物や細工を実践して見せて下さっているインディアンの女性から、実際に織物を肩にかけてもらい、踊りを教えてもらったりしたのでした。娘たちは、アメリカインディアンの子どもといっても全く異和感がないくらいでした。私は、アメリカの先住民族（インディアン）の人々の存在を、ここに来るまで忘れていたことに気づきました。そして、この場所で、夕食会に参加できて、と

てもよかったと思ったのです。

夜、八時頃から下の娘が立ちながら眠り出してしまいました。中庭に面したベンチで寝かせていたところ、ア



リゾナ大会のスタッフの一人が、素早く見つけて下さって、冷房のよくきいた快適な部屋に案内して下さいました。あまりの暑さに頭痛を訴え、気分が悪くなった方達も次々と案内され、長椅子で休養されていました。

このようなときの適切で親切な対応の様子には本当に感激しました。今回のアリゾナ大会は会場として急に變更して決まったために様々な予定變更があつたのですが、スタッフの人々はそのときそのときを、全力を注いでやって下さつたのだと思います。このときお世話になつたスタッフの方から、下の娘は“Sleeping girl”と大会開催中、呼ばれ、とてもかわいがって下さつたのでした。

フラッグスタッフへ

フラッグスタッフは、フェニックスから約二百キロ北にある町です。そして標高約二千メートルという高地です。気温四十度以上というフェニックスから、標高二千

メートルのフラッグスタッフまで、バスでだんだんと登っていくのでした。気温がぐんぐん下がり、フラッグスタッフに着いた時には厚めの上着が必要なほどでした。

北アリゾナ大学があるフラッグスタッフは高地であるために、涼しく、陽差しは明るく、白樺がとてきれいな、さわやかな気候でした。フラッグスタッフの町は車でグランドキャニオン観光をする拠点となつているので、たくさんドライブ・インがあり、ルート・六十六（六十六号線）という道路沿いに町がひろがっている感じでした。

世界大会が行われた北アリゾナ大学の広さには目を見張りました。学生達は車や自転車で構内を移動しているようでした。かなり傷んだ車もありました。大学構内の道路は、車と自転車と人というように三種類にわけてありました。自転車で猛スピードを出している人も見かけました。なにしろ、建物から建物に移動するのに、歩いて二、三十分が普通なのです。大会開催中は、スタッフ

の人々によって、十五分間隔で構内の主な道路をシャトルバスが動いていました。このバスに乗れた時には本当にほっとしたものです。学内は案内図を片手に持って歩いていたのですが、それでも迷ってしまい、自分が行きたい建物になかなか到着しないことも多くありました。

そのたびに歩いている学生に尋ねたりしました。どの学生も皆、とても親切に、丁寧に教えてくれたことはうれしいことでした。ふと日本の学生だったらどうだろうという思いも浮かんだりしました。幸い娘たちは私よりずっとはやく学内の地理をマスターしてしまったので、娘たちが案内役となり、私は素直にそれに従っていくことになりました。このようなことは、日本にいたら、絶対に考えられないことです。この娘たちの成長を心強く思いながら、広い広い北アリゾナ大学（NAU）で、八月三日から六日の四日間を過ごしたのです。

世界大会

OME P世界大会は、大会ごとにテーマが掲げられています。アリゾナの大会においては、「すべての子どもたちのために働く—子どもたちの生存、保護と発達のために」というテーマでした。そのテーマのもとに五つの柱がたてられていました。

- 一 発達と学習
- 二 家族、コミュニティーそして社会的サービス
- 三 健康、栄養と環境
- 四 ことばと識字能力
- 五 異文化間交流と国際化

これらの柱のもとに、各国の専門の立場から、基調講演、そして分科会、さらには場所をかえて、英語、フランス語、スペイン語による討論が行われました。そして同時に、テーマに基づいた個人の研究発表が行われたのです。OME P日本委員会事務局によりますと、このアリゾナ大会には世界三十八か国から四八七名の参加があったということです。これらのテーマについての細かい報告はいずれ文書の形で出されることになっています

ので、私が今回、初めて参加してみてもの印象を記してみようと思います。

八月二日の夜の世界大会の前夜祭のような夕食会が催されたのを皮切りに、八月三日には受付、そして夜七時半すぎから、北アリゾナ大学（NAU）の「講堂」というような風格の建物で開会式が行われました。開会式は、ナヴァホ族の青年による静かな祈りの儀式からはじまりました。この祈りの儀式で、やはりNAUがあるこの地域の特徴が明確になったと思えました。ひき続き、OMEPP総裁、NAU学長、フラッグスタッフの市長、OMEPPアメリカ委員会会長の挨拶がありました。どの方々もこやかで本当に私たちを歓迎して下さいているような印象を持ちました。そしてさっそくメキシコ文部省のある教授が基調講演をなさいました。

実はこの開会式には、まだ同時通訳の設備が全く準備されていなかったのです。そのために英語でのスピーチはなんとか理解しようと努力しましたが、スペイン語での講演は全くわからず、忍耐のみで過ごしました。こう

して二時間以上の開会式を終え、続いてOMEPP総裁主催のレセプションが二十分近く歩いたNAUの体育館で行われました。レセプションでは、冷たいレモネードと種々のドーナッツがサービスされました。温かなドーナッツが次から次へと出てきて、レセプションといった、日本のイメージからはかけ離れていましたが、スタッフの手作りの温かさを感じました。体育館では各国のパネルや写真をつかった展示が行われており、また教材など、子どもの関係の様々な展示、販売が行われていましたので、ドーナッツを食べながら見て歩き、夜十一時近くにやっとホテルにもどりました。このようなハードスケジュールは翌日もそのまた翌日も続いたのでした。

八月四日から六日の三日間は主としてテーマと柱にそって、基調講演、分科会、そして討論会が朝八時三十分から夕方五時三十分まで行われました。同時に個人の研究発表も行われていました。十時と四時には各会場にコーヒーや果物が用意され、ちょっと一息というところ

ろです。昼食は一時間十五分という時間が設けられていました。食堂まで、片道二十分以上かかってしまうので、午後の会に間に合うためには、大いそぎで済ませなければなりません。その上、夜には毎日、特別のイベントが用意されていました。

これらの毎日のプログラムをすべて消化することは到底無理なことでした。娘たちを連れていましたので、私にとっても娘たちにとってもあまり無理のない、参加の方法をとることにしました。アメリカでは十五歳以下の子どもは、親の目の届くところにいるように義務づけられているので、子どもだけを自由にさせることができません。そこで日本語の同時通訳が入っている特定の会場の、午前中の講演や分科会を聞くことにし、ゆっくりと食堂で昼食をとり、午後はNAUの生協や本屋を見たり、大学の構内を散策したりして過ごすことにしました。また、フラッグスタッフの町にも出て行ったりもしてみました。そして、毎晩、特別のイベントには参加したのです。まず、八月四日の夜には「メキシコ祭り」が

大会スタッフの人々と一緒に



体育館で催されました。メキシコ料理とメキシコ音楽を
楽しみました。誰からともなく踊り出し、その踊りは本
当に果てしなく続きました。すぐ南にあるメキシコは、
とても近い存在のようでした。次から次へと演奏される
のを、皆、大喜びで踊り、楽しんでいました。踊りの輪
は、参加した様々な国の人々で一体になった感じてし
た。次の八月五日の夜にはホピ族の踊りを見たり、皆で
歌やゲームをしたりした“World Festival”がありま
した。アメリカの黒人の女性（宣教師ということでは
た）が一人で皆をリードし、楽しいひとときを過ごした
のでした。ここでも参加した国々の人々が一つになった
ような感じがしました。その後レセプションとバザーが
ありました。バザーでは各国の参加者が持ちよった品物
が販売されました。深夜まで続いていたのですが、私は
娘たちと途中でホテルに帰りました。本当に参加者の体
力の強さとバイタリティーには参りました。

こうして最終日の八月六日の夜には、「閉会式」が行
われました。まず、四日間の講演や分科会で話されたこ

とを整理し、まとめたものが、この地方特有の、人が
立っているような形をしたサボテンの図に記入しながら
の報告が主なものでした。そして今回の閉会式では重要
な事柄が二つありました。一つはこれまでのノルウェー
のバルケ総裁が任期切れのために、カナダのピノー女史
に変わることに、そしてもう一つは次の一九九五年に行わ
れる第二十一回世界大会が、日本の横浜で行われること
が正式に発表されたのでした。日本のOMEPP国内委員
会の理事であり、コーディネーターの津守真先生が、
しっかりとOMEPPの旗を受け取られました。

これで二日の晩からはじまったOMEPP世界大会アリ
ゾナ大会は終わりました。私が参加した分科会では、南
アフリカ共和国の差別されている子どもの状況が報告さ
れたり、WHOのマジーニ博士がエイズにかかっている
子どもとどのように付き合うのかを子どもたちに伝えて
いくのが大切であることを強調されたりしていること
が強く残っています。世界中のあらゆる国が、それぞれ
の問題や課題を抱えながら、子どもたちと真正面から取

り組んでいる様々な人々の存在があらためて認識できたように思います。子どものことについて研究する研究者だけではなく、政府の役人も病気の子ども世話をする医者や看護婦も、そしてもちろん保母や教師たちも、子どもに関わっているすべての人々が、自分の国の子どもにだけ関心をよせるのではなく、世界的に様々な状況におかれている子どもたちに関心をもち、できることならば不幸な子どもたちに手をさしのべるという行為を実行していかねなければいけないのだという思いを新たにしました。

大会後

世界大会後は、バスでの長距離旅行となりました。アメリカに住んでいる人でもめったに行くことのないモニュメント・バレーを訪れ、雄大なグランドキャニオンで美しい日没を見たりという、いそがしい観光旅行ではできない体験をすることができました。

娘たちは、この旅でぐんと成長したようです。娘たちなりに、自分で買物をしたりして冒険し、自信をつけたようでした。アメリカの人々は、ほとんどが子どもと目が合うと、にこっと笑ってくれました。娘たちが買物のときに、コインと格闘していると、店員はうしろに人が並んでいても、にこにここと「子どもにとっては、とってもいいことよ」と言って待っていてくれ、うしろの客も同じように待っていてくれる態度は、とてもありがたく思いました。娘たちはアメリカの人々の温かさに触れたことで、アメリカが大好きになったようです。

はじめてのアメリカへの旅は、私たち母娘三人にとつて、意味のある、素晴らしい体験となりました。

(埼玉純真女子短期大学)

堀合先生に学ぶ(2)

頭も体も使って自分からいろいろと考えて、

自分の能力を十分に使うことを願う

上垣内 伸子

「そろそろいろいろ出てきはじめましたよ」という、

堀合先生のことばに誘われて、訪問した五月一日、保育室や園庭のあちこちで、思い思いの活動が始まっていた。先生の子どもへの関わりを中心に、降園まで観察させて頂いた後、何人かの子どもについて話し合う機会を持つことができた。その話し合いの一部をここに再現すること、三歳のこの時期に、堀合先生が、保育の中で大切にしておられることについて考えてみたい。

1. りょうちゃんの遊びのきっかけを作る

これまで、保育室のロッカーの中に入っていることが、続いていたりょうちゃんが、この日、砂場で、降園まで十二分に砂や水で遊んだ。彼の生き生きとした表情に惹かれた私たちは、このりょうちゃんの活動に関することから話し合いを始めた。

立川(以下T) りょうちゃんですけど、今日はりょうちゃんうまくいくなんで先生は思われるんですか？

堀合(以下H) いいえ、思いませんね。ただね、ゆいちゃんが、帰る時だけ、あの人のそばじゃなきゃいや

だと言うんですね。で、あれ、この人知ってるのかな
と思っただら、おにいちゃんだかおねえちゃんだかがお
友達なんですね。それでやっとわかりましたから、な
にかというと、いつも椅子を横に持っていて、りょ
うちゃんはこっつけてしてたんです。

昨日は、りょうちゃん泣いたんです。どうも、くた
びれちゃったみたいで。ところが、今日は同じあの中
に入っても、ご機嫌で割合と元気でした。それで、
ゆいちゃんが外へ行くって言ったら、りょうちゃんも
行くって一緒に行っただね、そこからね、始まった
んです。

上垣内（以下K） ゆいちゃんが来るまではずっとロッ
カーの中でしたね。

H そうでしたね。りょうちゃんは、初めは外で遊ぼう
という意識はなかったみたいですけど、ゆいちゃんが
働きかけてくれたから、自分もその気になったみたい
ですね。

T 外へ出ると後はもう全く対等でしたね。むしろりょ

うちゃんの方が積極的に、こうやってと少し世話を焼
いていました。それぞれで座り込んで、バラバラに遊
んでいながら、ゆいちゃんがりょうちゃんの真似をし
たり、あやかちゃん、さとしくんなどいました。

このような時、保育者自身が遊びに誘ったり、遊びを
提案することも考えられるが、そうして保育者が先にた
つのではなく、子どもと子どもの結びつきという、活動
の下地となるようなきっかけ作りを大切にされていると
感じた。

私たちは、この砂場での遊びを終日観察していた。そ
こで、次に砂場での遊びについて話題が出た。

2. プリンはなかなかできないもの……援助のあ
り方

T 今日、本当にびっくりしたんですけど、プリンとい
うのはなかなか生み出されないものですね。今日の砂
場に出てくるかなあと思っていたら、最後のところ

で、りょうちゃんが、入れ物に砂を入れて水を入れてポロッと落としたりひょうしに出来たんです。それを見たりりょうちゃんは、足で踏んでいました。

H そう、カップをふせるということは、割合と出来にくいことのようにですね。

以前は、初めは一生懸命遊んであげて、すっと抜けるというのだったんですけど、この頃は、あの人達、時代だと思えますが、我がが強くなってきていて、そうはいかなくなりました。

何しろ自分達にはやりたいことがあって、今日だって、水をジャージャーと、あんななんでもないことが面白いんですね。あんな時、お団子作ってみても見向きもしないのよね。大きい人の方が関心を持っているけれど、小さい人はそれどころじゃないんですね。これをやりたいと思ったら、なんていったってやるんですから。そういう人たちをこっちへ向ける必要はないですから。それより、ある時期がくると、「あ、おっこちちゃった」という偶然があるし、自分でやってみ

て形になる場合もあるし、そうやって、全くゼロから出ていっていいような気がするので、この頃は、余りその道を開かないんです。

T プリンにしても、おだんごにしても、子どもが、偶然にしろ、大きい人のまねをしたにしろ、そこまでに至るまでにはずいぶんと学んでいるんだと思うんですね。りょうちゃんが、水でビチャビチャとずっとやって、砂を入れてと、さんざん楽しんで、そこで偶然落としてプリンが出来る、その時は興味はないんだけど、何回かやって、そして、今度はもう一つ意識的に作ってみようかってことになるんでしょうね。

こういう活動を、形になるまでを、結構時間をかけながら、自分で考えたり、イメージをふくらませたり、感覚的に楽しんで、砂の性質を感じていくんだなと思いました。

K 感触を楽しむとか、言葉ではなくて砂と会話するとかというのは、こういう感じだな、こんなことが大切なんだなと感じました。



りょうちゃんの今日の活動を見てみると、どんどん感覚的になっていきました。シャベルを使っていたのが、そのうち、水をジャージャー、泥を足で、そして手を入れてと、遊びがどんどんブリミティブになって

いきました。これまで体験してきた、おままご的な砂遊びの衣を脱いでいくというか、今日は本当にいい顔をしてやっていました。お帰りと呼ばれたときも、りょうちゃんはすつと、手を洗って終わりにしていました。ああ、りょうちゃん今日はいいい仕事したんだなあと思われました。

H 今日の方は、割合赤ちゃんぽい面と、口とか考えがしっかりしているところとあるけれど、その口に出す考えが自分のものじゃないっていうか、考える過程での頭の動かし方は、非常に幼いように感じます。だからそれだけに、自分、いわゆる人間的な基盤となるものが型にはまっていない。あれを私共が近づいて、あれがいいわよ、〇〇がいいわよと、言わない方がいいんですよ。

T 幼稚園で、じっくりと、その子なりの物に対する取り組み方が許される……見ていてほっとします。文化的なものとは自然と身についちゃうんですよ。急ぐことはない。

H そうね、結局言葉にすれば、頭と体を、使う感触を感じながら使っていくことなんでしょうけど。

そのためには、昔は大人と一緒に遊んであげることが、大変いいってことだったんだけど、この頃はね、大人が手を出さない方がいいと思うんです。

私は、「一緒に遊ばない」って言うんだけど、そうすると「遊ばないんだ」と、ただうろろして、監督係みたいになる大人もいる。まあ、そんなふうに外側からは見えるかもしれないけれど、大人が手を出さない方がいいと思うんです。

年齢が進むと、手を出す部分も増えてきますが、自分から経験していくポイントだけは押さえておく。三歳の今は、全く自分のやりたいことをやっていいから、もちろん間違った事はだめって言うけど、それ以外の事は十分にやって、自分の持っているもの全部使って、頭も手も足も全部使って、何を収穫するか判らないけど、これからいろんなことを理解していく上で、の基を作っていく事が大切だと思います。

久しぶりの三歳の担任で、以前の三歳とはだいぶ違う、どう関わればいいのかとドキドキです。初日の次の日から、どうもこの人達は、逆に関わりすぎると余りよくない、集団生活の中で決まりもだんだん判っていくんだけど、言葉でいうんじゃないって、自分を十分出していくと、その中で知らない内に判っていくんじゃないかなと。だから今年は余り関わっていません。これまでは、もう少し三歳には関わっていたんですけど、今年はそれをしないようにしました。

T きまりを伝えるより、子どもがリラックスして自分の活動に打ち込めるように、そっちを大事にしていこうと思われたんですね。

H 大人の口を余りはさまないで、あの人たちのやりたいうようにやらせていこうと……どの程度あの人達がやるのか。どんなに軌道はずしたっていいっても、大きい人たちがしたときのようなスケールの大きい事はないですから。今日あたりは、ポカリとやることもできていましたから、そろそろいろんなことがあるんで

しょうけれども。そういう時くらい少し言って、後はやりたい放題くらいがいいんじゃないかしら。でもよく先生も神経を働かせて、だめなことは小さいことでも見のがさないことは忘れたくないですね。

大人から与えられた結論よりも、自分で見つけた事実の方が、そしてそれ以上に、そこへ行き着くまでの過程こそが尊いものであり、保育の中で大切にされることだと、考えておられるようだ。そこで、入園したての三歳児に対して、まず、やりたいことを、自分のやりたいように、心ゆくまでやりきることを保障しようとされている。そこから子ども達は、自らの発見に喜び、やり遂げた充足感を持ち、それが次の活動への意欲へとつながっていくのだろう。

3. はるちゃんの車庫作り……自分で考えるきっかけを

T 堀合先生が、子どもが遊ぶのに任せるとおっしゃい

ましたが、一つだけ今日の保育の中で、あっと思ったことがありました。保育室の真ん中に、車が散らばっていたんですね。「ああ、ここ車庫にしましょうね」とおっしゃった。そして、積み木を二つ三つ出したら、はるちゃんが、積み木を並べ始めました。あのまま続くとはい予想していなかったのですが、おまけに、女の子まで入って、発展していった。あのとき、私は、先生は片づけられるのかなと思っていたのですが、先生は、一つ置いて、環境を作られた。あれは、あそこに置くと、はるちゃんが参加するかなと予想されたんですか。

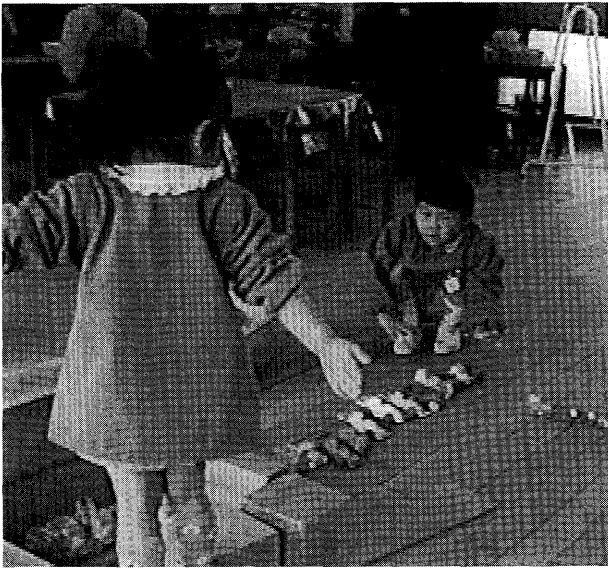
H そうですね。あの人は、これまでずっと車で遊んでいて、同じことしているわけね。で、そろそろね。遊びを見ていて、何か一つ、何がどうなるかわからないけれど、ちょっと方向をむけてあげると、そこから変化してあの人は考え出すんじゃないかと。そのことは、いつもしてあげないといけない。いくらやりたい放題でも、そこがないと、遊びが続かない。

でも、三歳は、一般的に、そうすると面白くなくなっちゃうんですよ。そうするとやらないようにする、それで過ぎてはいくんだけれども、今度ははだしで追いかけてみたり、ふざけてみたりね、少し大きくなるとそんな方向にいつてしまう。そうじゃなくて、たとえ大きくても、たわいないことしてるような時でも、自分がやりたいと思ったらそのことをしっかりとするような人にするには、ちょっと変化っていうか、考える余地っていうか、道を開けてあげると、その人達がそこから考え出していく、するとそこから面白くなってくるんですよ。

T ちょっとしたきっかけみたいなものを見事に用意していらっしやるけれど、決して、その子のイメージの先取りはしていかない。けれど、それをやりすぎると、子どもが「先生、その次どうするの」になっちゃう。かといって、イメージの先取りしちゃいけないって言うのと、手を後ろに回して監督係になっちゃう。なかなか難しいものですね。

H 声をかけることも少なくなっちゃったり。

T どちらかというと、はるちゃんは最初は自分のしたことを一人でウロウロしながらいた子どもでしたよね。その子があそこに座り込んで、あれだけあの積み



木ができる。その上、女の子が参加しても、その子が、どこに積み木を置いても、優しい目で見てる。「そこはダメだー」なんて言わない。きつとゆったりした気持ちになってるんだらう。普通だったら、そりゃだめだーと言うところでしょうけど。

先生は、誰でもじゃなくて、はるちゃんだからこんなきつかけをとという具合に考えられるのですか。

H そうですね。人でしょう。そしてその人の機会を考えてでしょう。

T いつも車で遊んでいる……とかいうのがおありになるから、こういう対応が出て来るんですね。

K あの女の子は、なぎさちゃんですが、「よーいスタート」という掛け合いや、模倣もありました。初めは、なぎさちゃんの方にイメージがあり、はるちゃんに命令する形でした。そして、はるちゃんの方も「スタート」と言うことが、相手に働きかけるきつかけと気付いたらしく、彼の方から、「スタート」と声をかけ、「遊ぼうよ」という気持ちを伝えようとしている

ようでした。

T なぎさちゃんが入ってきたことで、初めの気持ちより、はるちゃんもっと面白くなったんだろうと思います。この始まりは、やっぱり、片づけるのではなく、「車庫」という働きかけだったんですね。

堀合先生は、一人ひとりの子どもに対応を常になさっており、援助のあり方や子どもに対する思いは、現象としてみれば、当然一つ一つが異なったものになってくる。けれども、保育者が主導するのではなく子ども自身も自身が気付いていく、自分の頭で考え自らが活動することを通して自己の基盤が作られていく、そのことを大切にするとこの考えは、共通して底辺に存在している。そして、その働きかけは、常に子どもを深く理解していこうとする姿勢から生まれるものではないだろうか。

(十文字学園女子短期大学幼児教育学科)

保育への視座(9)

——若い保育者の方々へ——

河邊 杲

「ジョーイはたったいま、目をさましたばかりです。そして、ベビーベッドのわきの壁に当たっている四角いお日さまの光を見つめます。あそこで空間が光っている。

やさしい磁石がつかまえようとして引っばっている。

空間がだんだん暖かくなって、息をしはじめる。その中で、ゆっくりとダンスをしながら、いくつもの力がぐるぐるとおたがいのま

わりをまわりはじめる。…略…

ジョーイにとって、世の中との出会いは、そのほとんどが劇的で情緒的なものです。それはわたしたち大人にははっきりわからない性質をもつドラマです。いまこの部屋の中にあるものすべてのもののなかで、ジョーイの関心をとらえて離さないのは、四角いお日さまの光です。ジョーイはその明るさと強烈さに、目を奪われています。生後六週間のいま、ジョーイの目

は、まだ完全とはいえませんが、かなりよく見えるようになっていきます。……略……」と。

これは、ダニエル・スターン（アメリカ・幼児心理学者）著 亀井よし子訳の『もし、赤ちゃんが日記を書いたら』（草思社）の日記文の冒頭の抜粋である。

ダニエル・スターンが、そのはじめに書いていることを抄述すると、「赤ちゃんとその両親を観察していると、親がどれほど赤ちゃんの内面生活を知らたがっているかが、痛い程わかる。そこでお父さんやお母さんがほとんど無意識のうちに赤ちゃんに話しかける言葉に耳を傾けてきた。……「そうか！それが好きなのか」「やっぱり、緑色のはいらないのね」「はい、わかりましたよ、もう待てないのね、すぐですからね」「ほうら、これでさっぱりしたでしょう」などと話しかけている。親は、このように赤ちゃんの気持ちや欲求を自分なりに解

釈することによって、つぎに何をなすべきか、どう感じるべきか、どう考えるべきかを探るのだ。……あなたかだれかを愛していれば、その人の立場に立って、気持ちを推し測り、その思いを共有したくなるはずである。まさにそこから親近感や共感が生まれる。……おそらく赤ちゃんの表情から、そしてつい、いましがたまで、あなたと赤ちゃんのあいだで起きていたこととの関連から、赤ちゃんの動機・願望・感情を推測するはずだ。つまり、あなたの想像力が赤ちゃんの表情や動作の意味を知り、ある解釈を見つけ出すのだ……略……」と。さらに「こうした解釈が過ぎに赤ちゃんにどう接するべきかを知る指針となると同時に赤ちゃんが自分自身の経験について学習するための助けともなる筈である。」と説いている。そして生後六週間から、自分でお話がつくれるようになる四歳頃までの発達段階を追って赤ちゃんや幼児の心象風

景が描き出されていて、大へんユニークな本である。これはきつと保育に直接たずさわっている先生方にとっても保育についての新たな示唆を与えられるに違いないと思ったのでは是非一読してほしいと思いいここに紹介させてもらったのであるが、もう一つは、特に、保育に関する基本的な考え方や態度の見直しに大いに参考になるのではとも思ったからである。つまり、保育方法がややもすると自然科学思想にもとづく因果論や決定論に依り、操作主義的な方法に陥っていることに気づき、これを考えなおしていく参考にしてほしいということである。

さらに、最近あちこちの園内研修で実践研究に実践の記録が問題にされているが、形式の有無はともかくとして、「幼児の活動」「教師の援助（意図）」「その考察（省察）」の三つの要素で記述されている。そしてその「幼児の活動」については最近よく観察され、個人の言動等に

ついて詳細に記録されるようになってきていることは評価されるべきと思うが、やはり、まだ客観的な事実としてこれを把握しなければとされる態度が見られその活動が極めて外見的なものになっていることが目立つのである。例えば、四歳児入園当時によく見られる朝の出会いやあいさつなどの活動（その姿・表情・態度やことばなど）に見られるさまざまな個々の異なるものが見のがされていたり、その様々な生活態度に対する保育者の想いや考え方やその対応の様子などが欠如しているものが多い。

また子どものいろいろな姿態・つぶやき・活動の姿とそれへの保育者の対応とその対応の背景となつている保育者の考え方、感じ方、見方などについて見のがしたり、とりこぼしていることはないだろうか。特に保育者の想いとか意図に記述されることの多くは保育者の一般的ななねがいのようになっていいる。保育者

も人間だから常に感覚、感情が働いている。また価値観をものさしにして他人の行動を見ている筈である。こうしたことをあるがままに記述していくことが、保育者自身が自己理解を深め、保育を改善していくための第一になることは既に承知されている通りである。これらのことに前述の本は何等かの参考になると思う。いまひとつは、保育の中で迷いをもたれたことについて迷いのまま、または極めて理解し難い活動に出会ったら、その不鮮明のままを記録にとどめて置くことが必要である。

案外、記録には、はっきりした明瞭なすぐ理解できる活動のことのみが記述されていて、個人的な問題になるとこの迷いや不鮮明な活動のことなどについては質問されたりするので、おやっと思うことがある。

ところで、前述の『赤ちゃんが日記を書いたら』で最も参考になると思われるのは、その内

容と共に記述のし方であろう。子どもの心持ちや心のゆれうごく状況をことばに置きかえてみるのが大事である。

例えば雨ふりの日に窓からじっと空を眺めている子どもがいれば、その側に一緒に立ってみるとその子どもの心持ちに近づけることができるかも知れない時がある。四月入園当初からやっとならぬうちに慣れて来て、きょうも思っていたら雨になって、早く晴れてくれないかなと空をながめているであらうことが推察できる時もあり、彼にそのことをたしかめてみることによって一層よく理解できることもある。こうした自然環境とむき合っている場合や、友だちとトラブルが起きた時の両者の心持ちに対応した時など、当然対話の形で、そこで保育者が感知したことも含めて記述して置くことも大切である。

また、個人についてすでに先入観のような

のをもっていてそれとは全く別の面が見られたり感じられた時などはその発見の驚きをも含めて記述できると思う。

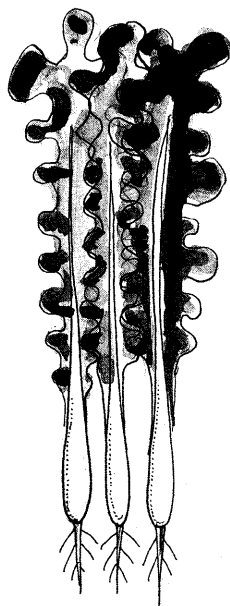
このように保育実践の記録が個人または小さなグループに関して内面に即した記述が整って来ると、当然、子どものそれぞれの世界を日記あるいはドラマのようなものに綴ることもできるようになると思う。

特に子どもが創り出す活動が集団という力を利用して一層機能するように援助していくためには、その子どもとのかかわりの一コマ一コマ

を子どもの内面に即してできるだけ接近するよう心がけたいと思う。またそれを可能にするのに、これらをいろいろな表現形式で綴ってみることも意義がある。日記であれ、伝記であれ、歴史であれ、劇であれ、詩歌であれ。

それぞれの子どもの日常生活を子ども自身が自己について語るように刻まれ、それが蓄積されて行くとき子どもは成長し、成長のメモリアルがそこに残るに違いない。このことは保育者自身についても言いうる。

(元洗足学園短期大学)



ある日の育児日記から

(29)

佐藤 和代



さあ、有もやつと保育園へ...と思ったとたん、熱を出してしまいました。やっぱり、環境が変わったものね、疲れたのでしょうね。予想していたので、小児科へも行かず、家で休ませていました。二日ほどで熱は下がり、また元気に登園です。ところが、一週間後。敬（主人です）が発熱。次の日から、ほっぺがふくらんできたのです。えっ、もしかしたら!!

そういえば、保育園で二人、出ていました。おたふくカゼが。有の熱がおたふくカゼだったなんてこと、あるかしら? 保育園で聞いてみると、

感染しても発病しなかったり、軽くて気づかなかったりすることはあるとか。そして、敬は、おたふくカゼの経験はないのです。

二年前は、圭の水ぼうそうをうつされた敬。こんなに免疫のない大人って、いるんですね。同情するよりあきれた私です。

「オレは、幼稚園に一日行って、登園拒否したんだ。そのせいで病気はうつらなかつたんだ」と本人は言っていますが...小学校は行ったんでしょ?

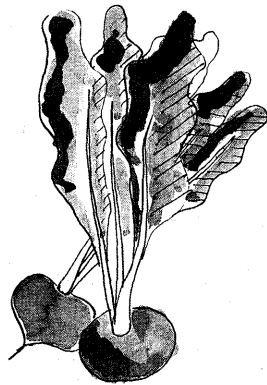
会社で「水ぼうそうの次はおたふくか」と笑われた敬。保育園でも、圭が言いふらしたので、「免疫のないお父さん」として有名になってしまいました。



保育現場で感じること

「自己中心主義をテーマに」

上坂元 絵里



私達の園では、現在、基本的にはクラス担任は持ち上がり制をとっています。五歳児の三学期ともなると、二年間あるいは三年間共に生活してきた子ども達の成長ぶりに、思いを深くするとともに、保育者の力不足で子ども達に、充分伝えられなかったことの多さにジレンマも

たくさん感じ、申し訳ない気持ちでいっぱいになります。五歳児ともなると、驚くほど言語的コミュニケーションも豊かになってきますが、そんな子ども達とのやりとりの中で、ジレンマと裏腹に、自分自身の言葉や態度の

中に、「押しつけがましい」とでも言うべきものを感じることが多かったのです。

「押しつけがましい」ということは、相手が自分の思うとおりに行動することを当然と考えるような、自己中心主義的な発想にもつながるのかと思います。

そこで、幼稚園という集団社会における自己中心主義の問題を考えると、幼児自身、保護者、保育者という三者について考えることができるかと思えます。

幼児期は、人間としての価値観の基盤が作られる、とても重要な時期です。とはいえ、幼児自身はまだ人間形

成の途上にあり、自己中心性は、この時期の特色として自然ともいえるでしょう。周囲がまだよく見えていないところがあり、自分の考えだけが正しいと考えやすいようです。一方で、判断の基準となる知識や経験もまだ少ないので、身近にいる人の影響をとて強く受けます。模倣をとおして身につけていくことも多いので、親や保育者の行動の仕方、考え方、ひいては人としての在り方が、彼らの価値観に非常に重要な影響をおよぼします。

まず、子どもの自己中心性はそれ自体、肯定的に受けとめたいと思います。その上で、子ども達が、他者を思いやる心をもち、客観的な判断力を備えた人になるように関わっていききたいものです。

ただ、最近感じるのは、幼稚園の時期に、他者への思いやりをあまり早急に求めすぎる、大人の側の「押しつけがましき」には、細心の注意を払う必要があるように思います。

泣いている友だちに気づいて、「どうしたの」「かわい

そうだね」と言えることはすばらしいことです。ただ、子どもの行為には、まず形から入っていく面と、気持ちとして感じて動いている面と両面があるようです。

「かわいそうだね」と言えたことばかりを大人がほめると、子どもは形として言うことばかりを身につけてしまいかもかもしれません。

保育者としては、子どもの行為を評価するのではなく、その子どもが友だちの気持ちによりそおうとした、あるいは、よりそうことができた心の方をしっかりと、感じとってあげられたらと思います。そして、子ども達の周囲にいる大人達がどう自己中心主義をのりこえていくかということがより大切に思います。

核家族で暮らす人の多い都会にあって、子ども達の背後にみえる親、特に母親が、とても視野が狭く、自分の子どもしか見えていない、見ようとしなないといったことがよく話題にのびります。ちようど運動会の日、ビデオカメラをのぞいて我が子ばかり必死で追いかけている様子に、例えられるかもしれません。

親、ここでは特に子どもに近い存在として母親を考えると、母親は「子どもを内包した自己」の幸せを最優先する、自己中心主義に陥りやすいように感じます。自分（わが子）さえ良ければということですが、ただし、ここでは、わが子を自分の所有物のように考えてしまいがちという二重の問題点もあります。本当の意味で自己を確立することが難しい現代社会、しかも受験等の競争社会の中で育ってきた母親は、時に、子どもの姿をかりて、自己達成感を味わおうとしてしまいます。自分の子どもを他の子どもと比較し、少しでも優れること、先に成長することを重視しがちです。

一方で、現代は、世襲制度が残る職業も少なくなりまして、子どもを一人の個人として尊重するという考えも随分、浸透しているように思います。けれども、子どもを尊重するという意味が少しずれてしまい、必要なしつけが不十分な場合や、放任主義になりやすいという場合もしばしば見られるようです。「叱らない」子育て観も定着した様ですが、子ども達の話の小耳にはさむ限り、

まだまだこわいお母様も多いようで、叱ってはいけなさと自分を抑えすぎてかえって、最終的には感情的な爆発をおこして子どもに対してしまうのではと、推察したりします。「叱らない」のではなく「叱り方」を考えることが大切なのでしょう。責任をもって判断し、行動できる人間となるように、価値観を作り上げていく援助として「叱る」ことが大切で、大人の考えを押しつけがましく、あるいは感情的に叱ることは避けるべきなのだと思います。また、子どものためという大義名分の裏に、親の自己満足が優先されていないか、子どもの成長を喜ぶといいながら、親の榮譽として自己満足になっていないか、といったことを自問してみることが大切なように思います。

父親の子育てへの参加がすすむ状況の中で、こうした傾向への歯止めになることが、子ども達のよりよい育ちにつながることでしょ。

最後に、保育者自身について考えると、例えば組担任制をとっているような場合、保育者自身も自分の組を内

包した自己中心主義に陥りやすいことがあげられます。

例えば、私共の園でも、担任自身が他クラスの子ども達に可能な限り心を向けること、他クラスの子ども達の活動にも積極的に参加関与していくことが、子ども達に大きな影響をもつと思われます。

子どもの自発性を大切にする保育といっても、子ども自身の内面から発するものと同時に、広く他者と触れ合う中から発するものがあるわけで、他クラスの活動にも敏感なアンテナを保育者自身、そして子ども達ももてることで、非常に遊びが豊かにもなります。

さらに、保育者としては、私自身の反省で考えてしまいますが、教師という役割を担い教育的配慮に努めながら、いかにそれを子ども達には直接感じさせずに接することができるかということがとても大きな課題と思えます。優しいけれど、子ども達に必要なしつけを伝えられない、あるいは、厳しいばかりで子ども達にとっては恐ろしい、わずらわしいというのではなく、優しいけれど、さりげなく大切なことを伝えられる保育者になれた

らと思います。

年長組で教育実習をした時でした。お弁当の準備中に、一人の女兒が私にしきりに話しかけていました。話を聞きながらも、「今、お友達何してる」と言うと、その子はあっと気付いて仕度を始めました。直接、「仕度をしましょう」と言うより、よく伝わったようその時は良かったと思ったのですが、こうした言葉かけも保育技術的になると、子どもに自分で気付かせるという押しつけがましさを増してしまうようです。

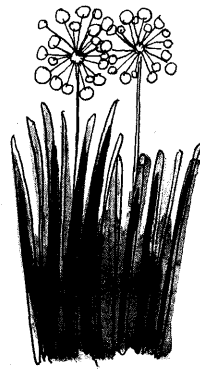
とはいえ、親が自分の子を誰よりも可愛いと思うこと、担任が自分の組の子を大変にいとおしく思うことは否定されるべくもないことで、要はバランスを失わないことかしらと思います。

「心から」「心のままに」子ども達と接していきたいのと改めて思いながら、また、明日をすごしていきたいものです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

心の鍵

松井とし



「熱はないが、幼稚園に行きたがらない」という母親からの電話連絡の後、S男は一日ほど園を休んだ。少しおどけた大きな声で「お・は・よ・う!」と言って、久しぶりに幼稚園にやってきたその日、彼が描いた一枚の絵が忘れられない。

お弁当の後S男は、部屋で一人後片付けをしていた私のところへ「絵を描きたい」と言ってきた。彼の自発的なはたらきかけをうれしく思い、丁寧に応じて四つ切りの画用紙を渡すと一心に描き始めた。線で描かれたその絵は象徴的な絵であった。右下に囲みがありその中にヒトが描かれている。そこから上の方に、ひかれた一本の線まで通路がくねくねと続いていて、上にいくに従って少しずつヒトが増えていく。そして、上下を切り分けたその線の上には、たくさんのヒトがにぎやかに描かれている。

描き上げたS男は静かに「描けた」と言い、小さな息をつくと自分から説明しだした。

「僕はここから（囲みの中）出る鍵をなくしちゃったから、ずっと出られなかったの」

「でも、やっと鍵が見つかって地上に出てきたら、友だちがたくさんいたの」

清々と話すS男の話を聞きながら、私は五歳の子どもの心が表したものに對して畏敬の念を覚え、感動していた。心が軽くなったのだろう。S男は友だちのところへ駆けていった。「風邪を引いても休ませるのに苦労する」と、母親たちを嘆かせるほど意欲的な子どもたちの姿。みんな楽しく過ごしていると思ひ込んでいた私にとって、S男の登園拒否は自分との関係において受け入れがたいことであった。主因を母子関係や彼自身の身体状況等ととらえた私は、特別な働きかけをせずに彼が自分を取り戻すのを待つことにした。S男には姑息的な呼びかけは通じないと思ひ、家庭で母子のゆっくりした時間を持つことの方が大切だと思ひたからである。

彼は自分で葛藤を乗り越えた。今こうして振り返ってみる時、心の鍵を開けるのは、彼自身だったのだろうと思ひ。しかし、彼の心に鍵をかけたのは、年長の二学期を『意欲的な生活と、密なる友だち関係』等と表面的にとらえ、日常性に埋没していた私が、作り出していた『環境』そのものであったのだろうと胸が痛む。

（元・幼稚園教諭）

幼稚園の先生になって…

渡辺 知子

私の園ではPTA活動の一つに『文集』作りがある。年度末に発行され、幼児が絵が描き、その横に保護者がコメントを書き、教師もページの分担で短文を載せるという内容がここ数年続いている。

先日「文集に載せるため、アンケートをお願いします。」と六つの質問が書かれた紙をもらった。その中に『先生になって良かったと思う時』というのがあった。私は「うーん」とうなってしまう。一言で言い表すことが出来るだろうか。毎日の生活の中で先生になってとまではいなくても、この仕事をしているから出会う出来事で、よかった嬉しいなと思うことは沢山ある。

街角で出会った四歳児クラス六月のAちゃん。どうして先生ここにいるの？と不思議そうな顔で見つめていた。翌日園に来て、自分からは話しかけることの少ないAちゃんが「先生と会ったよね」と小さい声で話しかけてくる。「ねえ、会ったね。先生びっくりしちゃった」と二人でにっこり笑いあう。その出来事が二人にとっての宝物となる。そんな時は嬉しい一時だ。私が先

生だから味わえることではないかと思う。

嬉しくない時もある。Dちゃんとの出来事。大型積み木一段目に乗りTVヒーローごっこをしていた五歳児クラス五月のDちゃん。「やられたー」とオーバーなしぐさで床の上に倒れる。少し離れた所にいた私は、遊んでいるなどその動きを目のすみに捉える。しかしDちゃんは倒れたまま動かない。「あれ、どこか打ったのかしら」と近づく。Dちゃんはピクリとも動かない。「Dちゃん」と呼ぶ。目を閉じ動かない。どこを打ったの、なぜ動かないの、なぜ泣かないの、応援頼まなくちゃ、いろいろな思いが浮かぶ。他の先生の動き、他の幼児の今の動き、Dちゃんの家庭との連絡のしかた……。その間ほんの数秒だったと思う。Dちゃんは片目を開け「しんだまねしてたんだ」とニヤッと笑う。全身の力が抜けたりと座り込んだ私。Dちゃんを抱きしめ「ああ、ああ」としか言えなかった。Dちゃんは笑い顔を引っ込める。「先生びっくりしちゃってね。本当にびっくりしちゃったんだよ……。Dちゃん動かなくなっちゃったで

しょう……」泣きたいくらい切ない気持ちで繰り返してしまった。あの日からもう十年以上も経ったけどあの時の心ふるえは今も身体が覚えてる。

四歳児クラス十一月のKちゃん。ままごとの棚、中型積み木、空き箱、いろいろな物を遊びに取り入れ片付ける時にいなくなってしまう。使う物が多いから片付けるのも大変。沢山の物を動かすからエネルギーも無くなってしまうのかもしれない。いろいろある物の中で中型積み木の片付けは特に難しい。というのは中型積み木は壁面の前が所定の位置で、壁面に飾られてある。たべもの列車に積まれた果物を取る時、乗ったり降りたりするのでビニールテープで区切られた中にきまりよく片付けなければならぬからである。

その日、片付けの言葉を言う前に「Kちゃんどうしよう。乗っても大丈夫なように片付けたいんだけど……」と声をかける。Kちゃんは積み木の片付けに加わる。半分くらい積まれたときKちゃんは「積み木はセンをそろえればいいんだ」とつぶやきながら直している。私は「せ

ん？」と聞き返す。Kちゃんは「そうだよ。せんだよ」と答え「ここがだめなんだな」と積み木を動かす。すごい、Kちゃんは毎日毎日の遊びのなかでこんなことに気付いていたんだ。「Kちゃんすごいことに気付いたね。こここのところの線を揃えると乗っても大丈夫になるんだね」「ねえ、こここのところ、この線を、ほらこんなふう揃えると乗っても大丈夫になるんだって」と私は嬉しくなつて、K男に声をかけたり、周りの子達に知らせたりした。

毎日の生活の中で、誰かの発見やつぶやきがクラスのものになつていく瞬間というのが時々ある。何かの遊びがいつの間にかクラス全体に広まることがある。遊びにおいては一斉に教師がさせるのと、いつの間にかクラス全体が一斉のようになっていくのでは、一人一人の幼児の意識には大きな違いがあるように思えてならない。Kちゃんのつぶやきはその後積み木を片付ける時「せんは揃ったかな」とクラスの中で生きつづけしている。このようなつぶやきをきちんと捉えることは、毎日の生活の

中で、私にとっては難しい。しかしこんなつぶやきをしっかりと受け止められた時もよかったと思う時である。C子との生活においても良かったと思う時があった。C子は自分の思いを強く出すが、友達とうまくかかわつていくまでに時間のかかった幼児である。C子は園内研究で研究対象児として記録した幼児であり二年間の過程がわりと整理されて残っている。C子の二年間の変容は次のようになる。

△四歳児四月～六月▽

○ 周りの人は、自分の思いや欲求は受け入れてくれる
と思ひ、相手場所をかまわずに、動きや言葉で表現する時期

C子は入園前は家の中で過ごすことが多く近くの公園で遊んだり、同年齢の子と遊んだりすることがあまり無かったということである。初めはこわごわ乗っていたブランコもその面白さが分かると「かわつてやらないからねえ」と言いながらずつと乗っていたり、友達が集まり

のため保育室に入った頃空いたブランコに乗ってなかなか降りようとしなかったりしていた。担任が「またあとでね」「今度また乗ろうね」と言っても聞き入れようとしなない。

C子は入園当初から自分の思いを強く出すが受け入れられないことも多くそのため泣いたりすることもあった。そこで担任はC子の欲求を受け止め満足できるようにした。時には我慢させたりきまりを守る大切さをしらせたりした。

C子は興味があることには自分から進んでかかわり、そばにいる人に思いを話したり尋ねたりする姿があり、園の中の物や場の名称、生活の言葉を獲得していきながら次第に友達や友達がしている遊びに関心をもっている。しかし遊びに黙って加わったり、「入れて」とは言っても返事を聞かずに遊びを始めたことなどで友達に指摘されることも多くあった。

△四歳児六月～十月▽

○一緒に遊びたい友達に自分の欲求を言ったり担任に言ったりする時期

九月のある日、同じクラスの友達か古毛糸を使い焼きそば屋を始めた。C子は店に近づき、黙って焼きそばをすばやくつかみとる。焼きそば屋をしていた友達に注意され焼きそばを返すように言われると、怒ったC子はそばにあったブロックを投げようとする。担任は友達と遊びたいのに遊び方が分からず、自分の思いついたやり方は拒否されどうしたら良いか分からないためパニックを起しているC子の思いを他の幼児に知らせ、C子に対しては財布やお金を作り「くださいな」と一緒になって客になり遊び方を知らせたりした。この時期担任は一緒に遊びながら遊びに必要な言葉を知らせたり友達とかかわって遊ぶ楽しさを味わわせるようにした。C子は一緒に遊びたい友達に一方的ではあるが自分の欲求を言葉や動きで出すようになり、友達と一緒に過ごす楽しさを味わうなかで友達は自分の思いどおりには動いてくれないことに気付いていった。

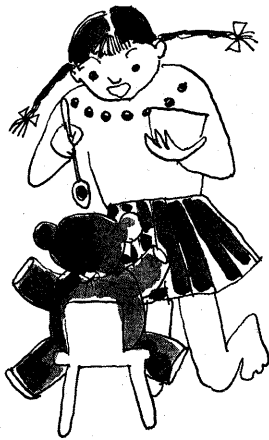
△四歳十月～五歳四月▽

○ 自分の考えや思いを言葉で表現しながら遊ぼうとするが、相手の反応を気づかうよりも自分の思いで動くことが多い時期

友達と遊ぶ楽しさが分かってきたC子は、友達と同じ場で遊ぶようになってくる。四人の女兒とおうちごっこを始めた時、B子と二人でどちらがお母さんになるかで譲らず、話し合ってジャンケンになる。しかしジャンケンに負けると「どうしても我慢できないよう」と泣き、他の幼児が嫌になって辞めようとする。「やめないで」と頼み、やっと遊びが始まることもあった。C子は入園当初から言葉で表現することができたが、言い放しだったり、自分の思いが強い時は相手の思いを感じることでできにくい時もあった。

三月、遊戯室でおうちごっこをする女兒二名と一緒に遊ぶが、保育室から電話を掛けたり（相手は見えない・声も聞こえない）、保育室で一人で紙を使って御馳走を作り届けるというかわり方をしている。御馳走を作っ

ている時同じ組の女兒が「なにしてんの？」と話しかけるが返事をせず黙々と御馳走作りをし、そばにいた教師に「Dちゃんが聞いているよ」と教えられて返事をする



姿がある。

△五歳児四月～九月▽

○ 相手の思いや考えを感じられるようになるが、自分の思いが強く、動きや言葉で思い通りに進めようとする時期

六月、前日F子と大型積み木を保育室に運び、『二階建ての家』を作って遊び「つづき」のしるしをつけて降園する。翌日登園後ハムスターとしばらくかかわり、その後、別の遊びを始めていたF子に近づき「昨日遊んでいたから今日も遊ぼう」と言う。F子は嫌がる。C子は一人で遊びを始めるが、度々F子を誘いにいき、自分の思いどおりに参加してくれないことが分かるとぶつとということもあった。担任は公正な立場に立ち、双方の思いを代弁したり、気付かせたり、一緒に考えたりしていくことでC子も、C子を取り巻く他の幼児の育ちも図っていくように心がけた。また、気持ちが悪く落ち着いた時の姿を他の幼児に印象付けていくようにした。

△五歳九月～一月▽

○ 思いどおりにならない時は動きでなく、言葉で伝えるのが良いことを感じ、話すようになる時期

C子は友達とルールを守って遊ぶ面白さを感じるようになり、ルールを守るなかで自分なりの表現をして楽しめるようになったことで満足感を味わい、言葉で伝えるのが良いことを感じて動きではなく言葉で表現しようとする姿が見られるようになる。担任は、ルールを守って遊ぶ姿を他の幼児に印象付けていくようにした。

△五歳一月～三月▽

○ して欲しいことを頼む時は、相手の思いや状況を考えて受け入れられるように話す時期

二月、同じマンションから通う隣のクラスのB子と「ドッジボールしよう」と約束して登園して来る。C子は同じクラスの男児二名を誘い一緒にコートでB子を待つがB子は来ない。C子は一人でB子を探し見つけると

「B子ちゃんドッジボールしよう。さっきやるっていったでしょ」と言う。B子は小声で「さっきやるって言ったけど、もうしないの…」と困ったように言う。C子は「つまらないよつまらないよ。少しだと面白くないよ。Bちゃんするって言ったよ。さっき」と早口で言い、口調や表情から「約束したのに、あんなにまっていたのに」という思いが感じられる。担任は以前のC子だったら泣いたり怒ったりするのだが……とはらはらしながら見守っていると、はっきり言葉で言っている。「だって少ないとつまらないよ」と繰り返すC子の言葉から担任はドッジボールを始めたい気持ちを読み取り、すぐ近くで一人で鉄棒をしていた同じクラスのH男を誘うように言うとC子は「うん、そうだね」と気分転換をして「Hくん、ドッジボールしよう」と誘い、H男が「いいよ」と答えると嬉しそうに二人で友達が待つコートの方に走っていった。担任はこの時C子が相手の思いや状況を考えようとする姿、言葉で表現し解決しようとする姿に接し、C子の成長を感じ嬉しく思った。

この時期、時には、思いにとらわれたり、強い言葉を使ったりすることもあったが、してほしいことを頼む時は相手の思いや状況を考えて言葉で表現する姿が見られるようになった。

以上がC子の二年間の変容である。

C子との生活でもいろいろな出来事があった。「えー、どうして…」と自分の力の限界を感じたことも度々であった。また一方で、「私のクラスにならなかつたら、違う生活を送っていたであろう」とすまない気持ちになることも度々であった。

『詫びる心―育ての心―より倉橋惣三著

自分としては一ぱいに尽くしてきたつもりであるが、その自分の足りないために、欠けたこと、誤っていたところも少なくなかったであろう。

そのまた、いっぱい尽くしてきたつもりが、その実甚だたるみの多いものであったではなからうか。自分の足りなさが、その自分に分からないのは、どうす

ることも出来難いとしても、もっと尽くせば尽くせるものを尽くし尽くさなかったことが気にかかる。

よろこばれると済まなくなる。礼をいわれると気恥ずかしくなる。嬉しさと目出度さに上気させられるような、三月末の賑やかさとはなやかさとの後に、子どもにはしらせずにそっと独りで詫びたい心が残る。』

こんな思いでC子をおくりだしたのは一年前のことである。力不足の私は先生という立場を忘れて思いをぶつけてしまったこともある。行き届かない二年間だったと思う。でも私とC子たちとのかけがえのない二年間であり、私にとって『先生になって良かったと思う時』がぎっしりつまった二年間である。

アンケートにはこう書いた。

○ 朝、シーンと静まり返った園舎に子供たちの声が響きわたり、壁際に押し寄せられたり片付けられたりした物が、次々と子供たちの手によって使われていくのを見ながらどんな一日が始まるかとわくわくしている

そんな時です。

新しい年度が始まる。子供たちは「年長さん」と呼ばれるのが嬉しい。一階の保育室から二階の保育室になることが嬉しい。嬉しいことがいっぱいある。その嬉しさを一緒に喜び、一日一日を大切に過ごしていきたい。

(新宿区立落合第四幼稚園)

若いお母さんたちへ

娘の幼稚園就園を考えて

河合 聡子

「四歳になったら幼稚園に行く」いろいろ考え迷ったのですが、娘のこの言葉で、昨年十月、私立幼稚園の入園願書を出さなかったことになりました。昨年の九月に三歳になった娘は、三年保育であればこの四月から幼稚園にいけるのですが、それは見送り、二年保育に決めたつもりでした。それでも、私の中では迷いがあり一か月後、結果的には抽選に外れた国立の幼稚園には願書を出しました。

私はこの一か月間だけではなく、その後も迷い続けました。四歳になったら、というのは、単に今よりも先の時間を意味しているのだと思い、少し時間をおいては「幼稚園に行くの？」と聞いていましたが、娘は、四歳になつてから、という結論を変えませんでした。行きたくなつたら行かせることにしよう、年度の途中でも、娘が行きたいと言い、その時に受け入れてくださる所があるなら行かせようという気持ちになつたのは、年が明けてからです。

娘の幼稚園就園について今までどう考えてきたかを振

り返ることでこれからの娘との時間がより豊かになったと感しています。

一、断乳以前

やっとなつわりもおさまった頃のことです。担任していたクラスの母親たちと会った時、どの幼稚園に入れるのかと数人の方から聞かれました。勤めていたY幼稚園から、私の住まいがそれほど遠くなく、通園可能だからでしょう。元の職場に入れるかどうか興味があったのだと思います。

とても印象に残ったのは、私と同じ東京都X区に住む一人の母親からの、やはり幼稚園の教諭をしていた友だちが自分の子どもを就園させる際、X区には納得できる幼稚園がなく、保育園の方が良いということで再就職したという話でした。どんな見方をしたのかはわかりませんが、X区にいい幼稚園がないとはっきり言われたことで、その後他の区の幼稚園に目が向くきっかけになりました。

保育園に入れることについては殆ど関心もなかったのですが、娘が生まれて間もない頃、保母をしていた私の母に、娘を保育園に入れた方がいいときっぱり言われたことがあります。母の保育を見たことはありませんが、研究熱心ですし、日々の話からも、私など及ばない素晴らしい保母者であると思っていましたので、子どもが家庭にいるよりも伸びやかに生きられるという確信を持っていたでしょう。私としても頭から拒否するつもりはありませんでしたが、娘と暫くは一緒にいたい気持ちが強く、笑って済ましていました。

娘が一歳を過ぎた冬の初め、母の薦めるZ保育園が土曜日の午前中に園を開放してくれていることを知りました。幸いこの保育園は私の家から十五分程で行ける場所にあり、娘を連れてさっそく訪ねました。

案内された部屋は、日当たりがよく木の床の温もりが心地好い所でした。子どもの為の部屋がここにある、それは、家ではとても望めないものでした。そこに居る園児ひとりひとりがとても可愛く、保母さんたちに、大事

にされていることが伝わってきました。

保育園にいる間、八時間（〜九時間半）を常に保育士さんに見守られながら生活している。給食も、プロの栄養士さんがいるのですから当然ではあるのですが、豊富な食品と調理方法、それがすうーっとでてくるのに感動しました。何しろ私は料理が不得意な上に、娘を一人にさせておくことができず、眠っているときにしか台所に立てない、という毎日を送っていたのです。保育園での生活が羨ましくもあり、ここの保育さんにも入園を勧められました。が、まだまだ母乳を飲んでいましたし、人見知りも強く、娘にとっては私と一緒にいるのがいいと思っていました。そして何よりも手元に置いておきたいという私も気持ちは変わりませんでした。土曜日の園庭開放以外にも、人形劇の会や、給食の試食会などに遊びに行かせていただいた後、体調を崩したのをきっかけに足も遠のいてしまったのですが、娘との一日の生活をつくっていくとき、この保育園の保育が意識されるようになりました。

私の住むX区にはいい幼稚園がない、という思いと、Z保育園の保育への憧れを抱きながら、娘の二歳の誕生日を迎えることになりました。

おいしい母乳をせっせと与え続けて断乳し、さあ、次は、幼稚園はどこがよいかしら、と探し回る―私が実行していた母乳育児相談室で目にした文章です。私と同じ母乳育児をし、既に断乳していた先輩ママが書いたものでした。今では、もっと力を抜いて気を楽にして、と応援してくれたのだと思いますが、断乳を間近に控えていたころは、言い当てられて苦笑する一方で、良い幼稚園を選ぶのは当たり前なのに、皮肉を言われているように感じていました。

断乳したのは娘が二歳一か月になった十月の末です。で、私立幼稚園の願書配布までに一年近くありました。

二、二年保育か三年保育か

実際には、断乳後、かなり長い間、娘が幼稚園へ行け

るとはとても思えない時期が続きました。

生後八か月の健康診断でも、体重を測るのに私から体が離れると大きな声で泣いて、お医者様にどうしたの？と聞かれ返事に困ったことを初めとして、人見知り、場所見知りの激しさには、当たり前とは思えないこともありました。断乳直後も、五組の親子が参加したかけっこで、一人で走れず母親と手をつないでいたのは娘だけでした。

翌年の五月から二か月余り、週に一度、母子講座に参加しました。アコーディオンカーテンで仕切られた一室で、親はさまざまな先生から二歳児についての話を伺い、子どもは専門の保育者に遊んで頂くという形式でした。私の最大の関心は、娘がどんな風にその場で遊ぶのだろうかということにありました。初日、当然の如く、私の手を握ったまま終わりの時間まで一緒に遊びました。九回のうち一日休みましたが、その間、だんだん慣れるというより、ある時は私から離れ、ある時は私が講師の方に視線をむけることも拒んだりするという状態

でした。親から子どもが離れることが講座の目的ではなかったのですが、娘はまだ離れないということを再認識しました。

私が勤務していたY幼稚園に入れていただくことも考えていたのですが、娘にとっては大きな障害があったのです。二歳になったばかりの秋、運動会を見にY幼稚園へ行った時、玄関で急に泣き始めました。原因はからくり時計でした。一時、二時、三時というように毎正時ごとにその数字のかかれた小さな部屋から人形が出てきて音楽に合わせ踊ります。私たちが玄関に居たのはちょうど正午で、その時には一から十二までのすべての人形が賑やかに踊ったのでした。私から見ればとても可愛い人形なのですが、娘にはしがみつかずにはいられない怖いものだったのでした。そして、このからくり時計の怖さがそのまま幼稚園に対する怖さになってしまったのでした。娘にとっては幼稚園と言えばY幼稚園であり結果として幼稚園に行くことはとても考えられない状況でし

た。

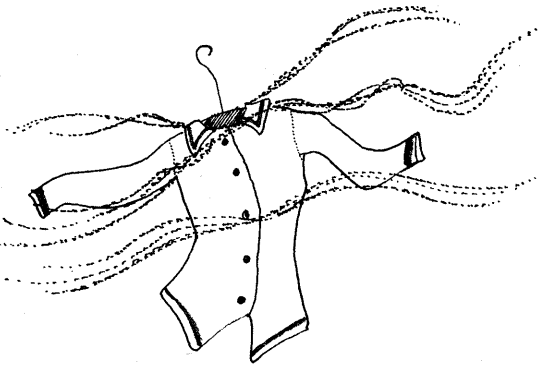
こんな風でしたから、三年保育は無理だと思っ
てのんびり構えていたのですが、初めてからくり時計に出会っ
てからほぼ一年後、「もう、お姉さんだから大丈夫」と
自ら宣言し、本当に平気でY幼稚園のからくり時計を見
られたのです。いつも遊んでいる公園でも同じ年齢の
子どもたちの親同士で幼稚園について具体的な話が出て
おり、三、四人がY幼稚園を希望していることを知りま
した。そうなると娘の口から、自分もY幼稚園に行くこ
うい言葉が出るようになり、私は慌てました。

同じ頃、大好きな友だちが通う保育園の運動会でお菓
子をもらえる競技に参加し、とても喜び、保育園へ行く
と言い出しました。私が娘が行くとしたら幼稚園である
ことを話すと、「しょうちゃんは保育園、恵理子は幼稚
園」とはしゃいでいました。

三、幼稚園選び

娘の三年保育を見送ろうと思っていた時も、他のお子

さんの幼稚園のことで意見を求められることがたびたび
あり、自分の理想の幼稚園について話すことがありまし
た。子どもと一緒にいることに喜びを感じる先生に、毎



朝迎えられられ、見守られ、応援されながら子どもが自分の一日をつくり上げられるように過ごせる幼稚園。個性を大切にされ集団の育ちも豊かにされる幼稚園。私はいつもこんなふうに答えていました。極々形式的なことでは、母親が作ったお弁当を持って、徒歩で通園できる幼稚園。堅苦しい制服がない幼稚園。園庭が土で緑豊かで雑草摘みもできるような幼稚園。勿論家庭の事情によって決めることですし、相手が決めた幼稚園に対して批判したこともなく、あくまでも私の好きな幼稚園、理想の幼稚園として聞いてもらっていたのです。

なるべく理想に近い幼稚園がいいと思う一方で、一番近い幼稚園がいいかもしれない、と考えが変わったこともありました。家庭での教育が基本であり、そこがしっかりしていればどの幼稚園であってもいいと思ったのです。しかしすぐに揺らいでしまいました。母子講座で一人の講師のかたに、教師によって子どもの伸び方が全く違ふとわかったから、先生を育てる側にまわった、という自己紹介を聞いたからです。教師によって違ふという

ならば、幼稚園も慎重に選ばなくてはならない、そう思いましたのです。

娘が幼稚園に行きたいと言い始めた時には、既に入園願書の配布が始まっていました。迷っている時間はありません。まっ先に思ったのは、Y幼稚園には行けないということでした。願書配布直前にY幼稚園の運動会で、担任していた子どもの妹や弟を連れだした父母に会い、娘と同学年で三年保育を希望していると聞いた時、ここには来られないと思いました。親としての私の言動が元職員のと受け取られるとしたら、先生方に迷惑をかけることになりかねないし、自分も窮屈ではないか、と考えたのです。

そして、最終的に願書を手にしたのは、環境も良く、多少時間はかかりますが、徒歩で通うこともできるJ幼稚園でした。私がY幼稚園に勤務していた時から講習会などでお邪魔させて頂いていた幼稚園です。そこには私を知りあいの先生が数名おられます。知っている先生がいらっしゃることで、私自身が安心していられます。何

より私が尊敬して、大好きな先生がいらっしゃること
は、大きな魅力です。幼稚園の教育方針や、先生同士の
育て合う姿勢もとても大事ですが、先生ひとりひとりの
資質が大きな力を持っている、という思いが強かったの
です。願書をいただいたあとと保育室に通され、初めベそ
をかいていた娘もすっかり遊ぶ気持ちになり、J幼稚園
に楽しい印象を持たせていただけて帰ることができまし
た。

四、やっぱり行かない

ほっとしたのも束の間、三年保育決定は白紙に戻るこ
とになりました。J幼稚園に伺ってから二日後、食事を
しながら、「ママと幼稚園まで一緒に行つて、恵理子は
先生やお友だちと遊ぶのよ」と軽い気持ちで話したので
す。「ママは？」と聞かれ、「家で待っていてお迎えに行
くのよ」と答えると、「ママと一緒に遊ぶ」と言うので
す。娘にとつては幼稚園とは、母親と一緒に遊ぶ場所
だったのです。そして冒頭の「四歳になったら行く」と

いうことになったのでした。

初めはなくなることがあっても、きっとすぐに慣れるに違
いない、と思つてみたものの、三年保育で入園した直後
母親から離れがたくて泣いている子どもの姿が思い出さ
れました。

二度目に三歳児のクラスを担当した時、入園式翌日に
ひとりで保育室に來られたのが十六人中、五人程でし
た。玄関で母親と別れても、「お母様が悪いの、私は一
階が良かったのに」と泣きながら手すりに寄り掛かるよ
うに、漸く階段を登つて來る子ども。母親に、今日は一
人で來るからと約束してきたのね、と言われながら、涙
を浮かべている子ども。私自身の力不足をさらけ出すよ
うで恥ずかしいのですが、一度目の三歳児のクラスとの
違いに戸惑つたものでした。

四月になれば娘も変わつていふと思ひながらも、十一
月初めの入園調査で子どもが親と別れる時間があるとし
たら、それは幼稚園との出会いが辛い思い出として残り
はしないか、慣れれば大丈夫という言うけれど慣れるま

でのその子どもの不安を無視できないのではないかと思
いました。

まだ、離れる時ではない。娘が行きたいと言うまで待
つことにしたのでした。

五、“行かない”から見えてきたこと

国立の幼稚園の抽選に外れた直後は、幼稚園に行けば
経験することを私が代わってやらなければ、という気持
ちがとても強くなっていました。幼稚園に行くことを基
準にしていたために、行かないことになったら、それを
補わなければならないという思いでした。二か月近くそ
の思いを背負っていました。ふと、自分は娘に、どう
育って欲しいと思っているのかしら、と問うてしまし
た。伸びやかに、自分のしたいことをどんどん実現し、
思いやりのある優しい子になって欲しい。卑屈になるこ
となく自分も大事にできる子になって欲しい。こういう
希望が、幼稚園に行くことで叶えられると思ひ込んでい
たところが大きいにありました。家庭での教育が基本に

あって、それを補助する形で幼稚園があることを忘れて
いたことに気がきました。

幼稚園に行かないから何かをしなくてはならないとい
う考えから解放され目の前が明るくなりました。

同じ年頃の子どもと遊ぶ機会を積極的に作ることは今
より大事になります。Z保育園にも遊びに行きます。そ
の他は洗濯物を干したり、外したり、たたんだり、料理
をしたり、掃除をしたり、草花を植えたり等日常の小さ
なことをするのは今まで通りのことです。博物館、美術
館、動物園、人形劇へは友だちをさそっても行けるで
しょう。今まで通りの毎日をほんの少し背筋を伸ばし、
丁寧に送ってあげたい。こう、ここまで来るのになん
と遠回りしたことでしょう。娘の「四歳になったら」と
いう言葉は鈍感な母親を刺激するための神様からの贈り
物のように思えます。

(はるにれの会)

新緑の五月となりました。新入園の子ども達も、そろそろ新しい環境に慣れてきた頃でしょうか。「堀合先生に学ぶ」

二回めは上垣内先生の報告です。「△歳からでは遅すぎる」などと、親心をあおるような幼児英才教育のはやるこの頃、今の子は、一見、小さいうちから教えるとよく理解し、適応することも上手になつたように思えます。でも、堀合先生のおっしゃる「今の子は考える過程で頭の動かし方が幼いように感じる。それだけに人間的な基盤となるものが型にはまっていない。だからやたらに手を出さない方がいい。言葉で教えるのではなく自分を十分に出していく中で、知らないうちに判っていくのではないか」という言葉に、ああ、やっぱり…、「教える」ことと「身につく」ことの間は直線ではなく、自分の頭と体を通った体験・実感という曲線で複雑に結ばれるものなのかと思いました。同じことが関祐二先生の「真の学力」の基礎につながっていくの

ではないでしょうか。

*

この季節、どこの家でも一度は柏餅を食べるのではないのでしょうか。学生時代近所の小さな和菓子屋さんでアルバイトをした時、五月五日の子どもの日だけで千個近い柏餅が売れたのにはおどろきました。当時は今よりもまだ季節感があつたのでしょうか。柏餅は意外と手間をかけて作るのですが、家庭でもおいしくできます。上新粉をこねて蒸し、一度よくついてお餅にしてからあんこを入れ、形よくつつみ、又蒸します。蒸し上がったら柏の葉で包みます。地方によっては、こしあんとな新粉をよく混ぜて、平たいおだんごのようにして蒸し、つばきのようなつやのある葉っぱ二枚ではさむ作り方もあり、これは小さいのでたべやすくできています。和菓子は洋菓子に比べ、道具や複雑な材料や調味料もいらず、作り方も簡単なものが多いので、是非、作ってみてはいかがですか？

(K)

幼児の教育

第九十二巻 第五号

(一九九三年五月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成五年五月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行人 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所

図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二一一

発売所

株式会社 フレーベル館

東京都千代田区神田小川町三一一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話〇三一一三二九二一七七八一

●本誌御購読の御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などございましたら、おとりかえいたします。

フレール館特別企画

ヨーロッパ幼児教育視察

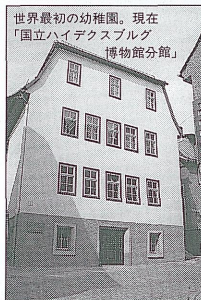
'93年7月27日(火)～8月7日(土)・12日間

フレール先生の遺跡と教育施設をたずねる

▶ドイツ・チューリンゲン地方→ロマンチック街道→コペンハーゲン→ロンドン◀

ごあいさつ

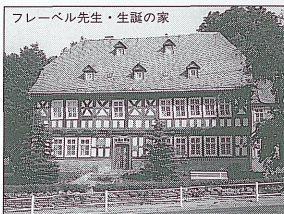
「フレール・ツアー」も今年で第14回を迎えることになりました。その間、「フレール生誕200年祭」「フレール幼稚園創設150周年」などの行事に参加し、また、東西ドイツの統一にも遭遇してきました。毎回、ご参加の先生方からご好評をいただき、2回、3回と参加されるファンの方もいらっしゃいます。今年は、幼児教育のルーツを訪ねるとともに、ロマンチック街道をバス旅行で南下し、後半は、アンテルセン、ハムレットなどにゆかりのあるコペンハーゲンを訪ねる企画といたしました。ぜひこの機会に歴史の薫り高きヨーロッパの風に吹かれてみてはいかがでしょうか？
お誘い申し上げます。



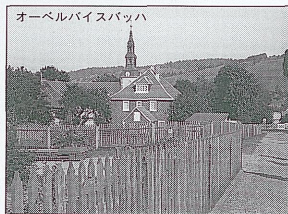
世界最初の幼稚園。現在「国立ハイデクスブルグ博物館分館」

フレール先生ゆかりの地 チューリンゲン地方

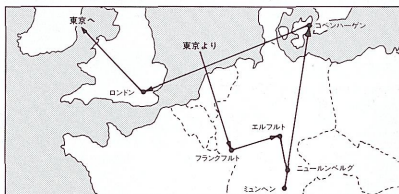
- エルフルト
- バードブランケンブルグ
- オーベルバイスバッハ
- バード・リーベンシュタイン
- ローテンブルグ
- コペンハーゲン
- オーデンセ
- ロンドン



フレール先生・生誕の家



オーベルバイスバッハ



旅行期間 1993年7月27日(火)～8月7日(土) 12日間

旅行代金 867,000円 (おとな1名様)

募集人員 25名 (定員になり次第締切)

申込締切日 1993年5月31日(月)

企画：キンダーブックの**フレール館**

旅行：日本交通公社  運輸大臣登録
主催：日本交通公社  一般旅行業第64号

●お問い合わせ先

フレール館 ヨーロッパ幼児教育視察係
東京都千代田区神田小川町 3-1
〒101 ☎ 03 (3292) 7781(代)

JTB団体旅行新宿支店ヨーロッパ幼児教育視察係
(運輸大臣登録一般旅行業第64号)
東京都新宿区西新宿 1-18-8 スカイビル 4階
〒160 電話03 (3346) 0181 (月～金09:30～17:30)

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレール館

名作童話の世界があなたの保育技術と演技力アップで子どもの心によみがえる

『ザ・エプロンシアター、ザ・パネルシアター』

保育者と子どものかかわりに重点をおいて編成されたもので、演出の細かな注意点と指導例があげられています。劇のストーリーを楽しむだけでなく、保育者と子どもが会話をしたり、合唱するなど、劇遊びに参加することから子どもが身近な社会・自然・生活などに興味をもち表現力や社会性の養成に役立ちます。



はいき保育資料①

ザ・エプロンシアター①

- ① 「はらべこ かいじゅう」
- ② 「おふるにはいろう」
- ③ 「ねずみの すもう」

はいき保育資料③

ザ・エプロンシアター②

- ① 「まる さんかく しかくなあに？」
- ② 「うさぎさん インフルエンザ」
- ③ 「大きな かぶ」

はいき保育資料⑤

ザ・エプロンシアター③

- ① 「みんな ねんね」
- ② 「りんごの木」
- ③ 「せんたくしましよう」
- ④ 「どうぶつ いっぱい」

中谷真弓・著

AB判・80頁・各定価2,500円(税込)



はいき保育資料②

ザ・パネルシアター①

- ① 「三枚のおふだ」
- ② 「ころころまでまで」
- ③ 「おばけの いつごちゃん」

はいき保育資料④

ザ・パネルシアター②

- ① 「ももたろう」
- ② 「おおきくなったらね」
- ③ 「ハッピーバースデー おつきさま」

はいき保育資料⑥

ザ・パネルシアター③

- ① 「ひつじかいとおおかみ」
- ② 「たまごがころん あれあれ！」
- ③ 「あいいうおうじ」

阿部 恵・著

AB判・80頁・各定価2,500円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783代にお問い合わせください。